
風鈴の契約者

海藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風鈴の契約者

【Nコード】

N4508M

【作者名】

海藤

【あらすじ】

のんびりのほんが俺の望み。その望みが叶わないだろう事は分かっちゃいるけど、望むだけなら勝手だろ？だから、俺はのんびりのほんっとしていたいんだっつーの！刺激的で退屈しないなんて日常はいらんわー！（そこそこ最強主人公（多分）によるいきあたりばったりなゆるいファンタジー？です。※基本本文は一人称で進みます。）

00 始まり

世界は人ならざるモノ達によって、見守られ、時が過ぎていく

温かき大地は全ての生命の源となり、蒼き水の流れへと繋がる

優しき水は生命の繋ぎとなり、深き緑の風と踊る

力強い風は生命の運び手となり、紅き炎が舞いあがる

大地、水、風、炎はひとつとなり、光と闇が生まれる

希望と救いの光は生命を創り、人々を導く

静寂と安らぎの闇は生命を還し、そして生命は世界を巡る

*

この世界は、精霊達が愛する世界ゆえに自然があふれている。人々が多く暮らす大きな街中であっても、近くに山があり、川がある。

自然と共にあることは人々にとって当然であり、それを壊そうと考える者は少ない。

空を移動しながら”彼女”は暇を持て余していた。

”彼女”は退屈で暇な事が嫌いな事は、”彼女”と同類の彼らは分かっていた。

だが、”彼女”の退屈に付き合わされては、彼らの身がもたない。ゆえに彼らはこう思うのだ。

わが身に降りかかりませんように…と。

”彼女”は決して残虐非道なわけではない。

ただ、退屈が嫌いで面白い事が好きなだけだ。

そして賑やかで楽しいことが好きなだけなのだ。

そこに悪意は全くない。

”彼女”はふと面白い事を思いつく。

その視線の先には、声を上げて走り回る6〜7歳程の少年達。

この周囲の国々では対して珍しくもない黒髪の少年たちだ。

瞳の色も珍しくもない紺や茶。

”彼女”が気にかけるような何かトクベツを持つ者がいるわけではない。

だが、”彼女”は思いついてしまったのだ。

時間が経ち、少年たちがパラパラと自然に家に帰って行くのを見る。そのうちの1人がまだ遊び足りないと言っても言うような表情をしてい

たのが見えた。

もっと遊びたい、楽しい事をしたいと言いたげだ。

その気持ちに”彼女”は大きく同意したいと感じた。

その少年は何を思ったのか、小さな山の方に駆けだした。

小さいとはいえ、その山には獣もあり、子供1人で遊ぶにはそろそろ危険な時間帯だ。

だが、少年は自分の楽しみを満たす事を優先した。

案の定というべきか、しばらくすると少年が恐怖に顔を引きつらせながら山の中を走り回っているのが分かった。

”彼女”は、ふっと口元に笑みを浮かべて降りる。

恐怖で更に山の奥へと向かってしまっている少年と、目の前の柔らかい肉を得ようとしている鋭い牙を持つ狼達の間へと。

ふわりっと舞い降りた”彼女”に重さは感じられない。

本能で何かを感じたのか、狼たちは足を止めてその場で”彼女”をじっと観察する。

少年は幼いながらの感覚で足を止めてゆっくりと”彼女”の方へと振り返る。

「ね、取り引きしよう」

にこりっと笑みを浮かべながら”彼女”は少年に手を伸ばした。

差し出された手は白くとても綺麗な手で、さらりっと舞う長い髪は新緑の色。

少年にとって見た事もない美しさを持つ”彼女”。

かけられた声が自分へ向けられたものとは思ってもせず、少年は”彼女”に見惚れた。

「君を助けてあげる。だから、取り引きしよう」

尋ねるのではなく、選択肢を与えるわけでもなく、その言葉はすでに取り引きが決定付けられたかのような言い方だ。

少年にはそんな事分かるはずもなく、引き寄せられるように”彼女”の手を取る。

「取り引き成立、だね」

にこっと再び”彼女”は少年に笑みを浮かべる。

少年がぎこちなくだがこくりっと頷くと、ざあっと大きく風が舞う。その風は狼達に恐怖を抱かせ、狼達は怯えるように少年と”彼女”から逃げ出す。

「君の名前は？」

笑顔のまま問いかけられ、少年はぽつりっと自分の名を口にする。

「佐久耶^{さくや}…」

この近隣の国では貴族以外に姓はない。

少年は、本当にどこにでもいる普通の少年なのだろう。

だが、それは今日のこの日迄の事。

「サクだね」

自分の名前の呼び方を縮められても全く気にせず、少年…佐久耶は頷く。

「じゃあ、サク。聞いて」

そして”彼女”はとても意味ありげな笑みを浮かべる。
ふわりっと風が”彼女”の声を外に漏らさないようにと2人を包み込む。

「私の名前はね…」

ゆっくりと少年の耳に届くその名はどこか心地よく、それでいて耳に残る。

”彼女”の名前が少年に浸透し、そして少年はゆっくりと意識を落とした。

それが始まり。

普通の少年が、普通でなくなった始まり。

”彼女”と佐久耶の始まりだ。

01 これが俺の現状

俺は汪秦オウシンっつー、この世界ではそこそこ大きい、周囲の国々とはちよつと違う変わった文化のある国に住む普通の17歳だ。
オウシン汪秦では、髪が長いのが普通だから勿論俺も長い。

黒い髪を後ろでざっくり1つにまとめてある、目の色はどこにでもある紺色だ。

たいして珍しくもない、本当にごくごく普通の容姿だ。

家は商家だ。

家庭で扱う小物を主に、海外から珍しいものを輸入して売ったり、色々。

俺は三男坊で別に家を継ぐ必要もなかったりするもんだから、のんびりと家の手伝いをしながら親兄弟と一緒に暮らしてる。

一番上の兄貴は結婚して嫁さんもらって、後継ぎとして一生懸命親父に仕事を教わってる。

長男は大変だ。

二番目の兄貴は農業に興味を持ってたらしくて、どっかの農村に行っただけだ。

どっかと言っても農村の名前を知らないだけで、どこにいるかは知ってるし暮らしも充実しているようだから、何の心配もない。

そんなこんなで、俺はのんびりのほほんっと三男坊生活が続けるのが今の夢だ。

まあ、勿論、将来的には可愛い街娘をお嫁さんにもらって独立とかもしてみたいが、それはもうちょっと先でいいだろ。

家の商品運んだり、お客さんとこにこ談話したり。

うん、平和でいいよな。

(つ・ま・ん・な・いー!!)

ぐわああんっと頭に響く女の子の声。

勿論俺以外には聞こえないだろう事は分かっているから、表情を引きつらせる程度に反応をとどめておかないと、周囲に変に思われる。

(うっさいぞ、フィラ!)

(だって、だって、サクってば最近普通の日常でつまんないんだもん!)

脳内で会話をする俺達。

昔はこの脳内会話するのも慣れなくて大変だったが、今では悲しい事に面白いほど会話が続くほどに慣れてしまった。

(つまんなくて結構! お前がつまらないってことは平和ってことだ、うん!)

(えー、刺激欲しい。刺激的な日々がいいー)

俺くらいの年頃になると、ちょっとくらい無謀な、でも刺激的な日を過ごしてみたいって考えるのが普通らしい。

けど、悪いが俺は十分すぎるほど刺激的な日をおくらせてもらったから、もうそんな日々は必要ない。

(ね、ね、サク。今度はどこ行きたい?)

(くおらっ、まて! どっかに行く事は決定か?!)

(だってこの国そこそこ平和だから、取りあえず街中で事件なんて起こらないし。となればっ!! やっぱり、外に行かないと!)

外出が決定となってしまうて、思わずため息がこぼれてしまう。

普通に旅行するなら俺も別に構わない。
けど、コイツと一緒にだとロクなことにはならないのは経験済みである。

（この間、風の噂で西方でソコソコ強い盗賊団がデカイ顔して困ってるらしいって聞いたんだけどなあ）

（誰が行くか！）

（えー、だって、盗賊団なんていたらそのあたりに住んでいる人達困るよ？ 大変だよ？）

（……ぐ、軍が一応あるだろ）

（田舎の方だから、軍隊なんてだせないし、かといってその辺の警備兵とか傭兵じゃ無理だよ。軍隊が簡単に出てこないってのはサクも分かってるでしょ？）

（そ、そりゃそーだけだな…）

オウシン
汪秦もそうだが、大国ってのは総じて田舎を軽く扱いがちだ。

少数を切り捨て多数を取る。

仕方ないっちゃ仕方ない事だ。

軍人らが暇していて田舎に出向かないわけではない。

色々理由があって、軍隊を派遣できないだろう事は分かっているのだ。

だが、そうは言っても助けられるものならば助けたいと考えてしまうのが、きっと俺の悪い所なんだろう。

（…で、どこだ？）

盗賊団相手に普通ならば1人でどうかしようなんて思わないだろう。

生憎と俺はどうかできる手段があるにはある。

この頭に響く声の主であるフィラのおかげで。

(西方でも一応国内だよ。風秦地方はずれの国境ギリギリあたりの
小さい村の近く)

(今夜、行くか)

(うん！そうこなくっちゃね、サク！)

楽しい声に思わず普通に再びため息がこぼれてしまう。

(けど、これで最後だからな！次は行かないからな！)

(うんうん。そうだといいね)

(断定を勝手に希望に変えるなああ！)

(いや、だって、サクってば、なんだかんだと言いながらも結局は助けられる人は見捨てられないからさ)

分かっている。

いくら退屈しのぎとはいえ、フィラの提案は結局は悪い事ではない。
大抵誰かを助けたり、なにかの為になったりする事ばかりだ。

被害をこうむるのは俺だけ。

と言っても、俺は自分が犠牲になって皆が幸せになるならいい…な
んて正義心は持ち合わせていない。

結局は自分が可愛い。

けど、今の自分にとって出来る事ではあるから、引き受けるだけだ。
決して刺激的な毎日を望んでいるわけじゃないんだ！

絶対、絶対、いつか、のんびりのほほんっと空を眺められるような
日々をつかみ取ってやるっ！！

*

唐突だが、この世界には精霊がいる。

オウシン 汪秦では精霊に対して信仰心が大きい訳ではないが、その存在は当たり前のように信じられている。

オウシン なぜならば、汪秦の代々の王は精霊の契約者であるからだ。

精霊ってのは、人間と違う大きな力を持ち、自然を操り、長き時を生きるこの世界に当たり前に存在するものだ。

土、水、風、炎、光、闇の6つの属性の精霊がいる。

精霊たちの中でも色々強さはあるらしいが、どんな精霊とでも契約を交わした人間を契約者と俺たちは呼ぶ。

元々精霊は小さな頃は見えても、大人になるにつれて段々とその存在を感じ取れなくなるのが普通らしく、精霊と契約できる人間はごく少数。

その少数のうちの1人が汪秦^{オウシン}の国王だ。

契約者がどんな存在であるのか、契約者となる事で何が変わるのか。それを詳しく知っているのは契約者となった者だけ。

まあ、何ができるかは契約する精霊の属性や、精霊の位によって結構変わるらしい。

「ねえ、ねえ、サク。もうちょっと速度上げないと、帰りは明け方になっちゃうよ?」

「: つつても、これ以上は寒いんだよ」

「そう?」

「こんだけ高度上げて飛んでりゃ、寒いに決まってるだろっ!」

ふーんと気にしていないかのように俺の隣と一緒に飛んでいるのは、普段は頭の中に声を飛ばす存在、フィラである。

今、俺はかなりの高度と速度で雲の上を飛んでいる。

時間は太陽が沈んで月が出てきている夜だ。

普通の人間は空なんぞ飛べん。
なんで俺が空を飛んでいるかと言えば、俺が先に述べた契約者であるからだ。

契約相手は俺と同じように飛びながら寒さも感じない隣にいるフィラ。

さらさら風に揺れる新緑の髪は綺麗で、同色の瞳も綺麗だと思う。
月明かりで髪の色は新緑に蒼がかった色に見えて、神秘的にも見える。

誰がみてもフィラはきつととびつきり可愛いと思う。

フィラがにこっと笑えば、顔を赤くする野郎どもは多数だろう。
断言できる。

俺が何でこの国でも数少ないだろう契約者であるかといえば、フィラの気まぐれだったとしか言いようがないだろう。

元々俺には契約者になるような才能なんて微塵もなかった。

だが、契約した時期が幼かったから、素晴らしく綺麗に契約が馴染んでいしまっているらしい。

最初の頃は精霊と契約した事でもものすごく喜んだ。

そうだろう？だって、契約者ってのは数が少ないトクベツな存在だ。

自分がトクベツだと優越感ってものがあったってちよつと嬉しいもんだ。
だが、その優越感が消え去ったのは結構すぐだった。

フィラの属性は風。

風の精霊ってのは退屈嫌いで、暇も嫌いで、面白い事が大好きな気まぐれな存在らしい。

退屈嫌いなフィラに振り回される事何百回か：国内はおろか、国外にも連れ出され、危険な場面に出会えばフィラの精霊の力を借りて一掃。

何度この理不尽な行いに叫んだ事か…。

しかし、上目遣いで「ごめんね」とうるうるされてしまうと、結局何も言えない駄目な俺。

し、仕方ないだろ！フィラは可愛いんだっ！性格がアレでも可愛いんだっ！

そんなこんなでフィラと契約して10年。

色々あって体術もフィラに教えてもらったり…つか、なんで精霊が体術できるんだ？

契約者の特権である、契約相手の精霊の属性の力を使えるようになる…。

強くなれたってのは良かったのかもしれない。

けど、けどな！

人助けが多かったとはいえ、殺伐とした場所に連れて行かれる日々を10年間だぞ！

平和でのんびりした日が恋しくなるのは当然だろ？！

「サク、そろそろ色変えないと」

「あ、ああ。そう言えばそうだな」

ずっと目を閉じて集中すれば、自分の髪の色と瞳の色が変わっていくのが分かる。

フィラと契約した事で変わる髪の色と瞳の色。

変わる色はフィラと同じ新緑の色だ。

別に変えなくても風の力は使えるんだが、フィラの力を限界まで借りる時は色が変わるのは強制らしい。

今、わざわざ色を変えるのはフィラの力を全力で使いたいからではなくて、その方が俺が俺だと分らないからだ。

契約者ってのは国内でも数が少ない。

万が一姿を見られて俺だと知られてしまつて、契約者である事が分かれば問答無用で軍入りだ。

軍隊が厳しい所であると思つて聞いていた俺は、絶対に問答無用の軍入隊は嫌だと思つたのだ。

幸い、強制軍入隊はフィラの面白い事には入らないようで、正体がバレない為に色を変える事はフィラ的にも賛成のようだ。

フィラは、自由きままに色々な所へ飛んでいって、厄介事に巻き込まれるのが好きらしい。

「それじゃ、盗賊退治。張り切つて行こう！」

「退治っていうより闇打ちだと思ふんだが……」

「卑怯上等！」

そんな事をはつきり言い切るフィラは、本当に精霊なのだろうか？と思つてしまう事がある。

まあ、精霊には精霊の考えつてのがあるんだろうけどな。

正々堂々やらないと駄目って言われるよりはいいのかもしれない。

俺とフィラは速度を落としてある地点で空に止まる。

ゆっくりと高度を落としていくと、そこが森の中である事がこの薄暗い中でもなんとなく分かる。

森の中にぼつぼつともる明かりは盗賊団の住処がそこにある証拠なんだろう。

「声拾つて確かめる？」

「いや、もう確認した」

明かりが見えた時点で、風をささつと使つて下から聞こえる音を拾つた。

聞こえる声とその内容は、どう好意的に考えても普通の村人たちの

会話ではないだろう。

とにかく早く終わらせたい。

俺はさっさと帰って寝るぞ！

俺は右手を上げて手の平を空に向ける。

それだけで風は応えてくれる。

さわりつと優しく頬を撫でる風、力強く舞い上がる風。

風が手の中に集まるこの瞬間が、俺は結構好きだったりする。

「吹き飛ばええ！！」

勢いよく上げていた右腕を下げる。

その瞬間ざあっと風が嵐のように舞い、森の木々の間をすり抜けて、そこにいる存在を巻き上げる。

風の塊ぶつけて、押しつぶすってこともできるがそれは色々後味が悪いからやらない。

適当に盗賊どもを気絶させておいて、日が昇った後に通報でもされればどうにかなるだろうと思う。

一度盗賊団を根こそぎ潰して、後々その周囲の村々が困っていた事があったから、根こそぎ潰す事はあんまりしない。

程良く平和に解決が一番だ、うん。

「なんか、地味…」

「十分だろうがっ！」

「えー、でも、ほら、降りて1人ずつなぎ倒した方が面白そうだったのに…」

「んなことしたら、日が昇っても終わらんわっ！」

1人ずつなぎ倒した事も以前はあった。

はっきり言ってあれは、果てしなく時間がかかる。

デカイ盗賊団ならば尚更だ。

「ま、日帰りじゃ、こんなものだよね」

「今は家の仕事手伝ってるから、泊まりでの外出は難しいしな」

家の手伝いが出来ない幼い頃ならば、適当にごまかして何日か家に帰らない時もあった。

だが、今はそうもいかない。

とはいえ、商家の手伝いにも休みはある。

「サクの休みの日に合わせて、何かないか探してみようかな…」

「俺はのんびりした休日を過ごしたい！」

「無理無理」

「即否定?!」

のんびりした休日は確かに望んでいる。

それでも、多分休日はフィラに連れまわされるんだろう。

のんびりした日々を望みながらも、最終的にはフィラの頼みを断れない俺。

それは多分、こんな日々も結局は嫌じゃないからなんだろうと思う。

02 精霊王

俺は今、西の果てにある精霊の森に来ている。

オウシン 汪秦からは勿論かなり離れている場所なのだが、風の力を使つての移動手段がある俺にはどれだけ離れていてもあまり問題はない。

ただ、移動速度があまりにも早いと移動中俺が寒いだけだ。特に夜。何でそんな精霊の森なんて所に来ているかってーと、原因はフィラだ。

俺はいつものように家の手伝いで商品の運びこみをしていた。

そこに唐突に「サク、新しい子が生まれたから行くよ！」と頭の中に怒鳴り込まれ、かろうじて兄貴に外の出る事を伝えて引っ張られるようにしてここに來たわけだ。

「ほらほら、サク。この子達が今回生まれた子達だよ」

ふふっと笑いながら手のひらにわらわらと緑色の小人のような存在を3人ほどのつけているフィラ。

ものすごく嬉しそうなのがその表情を見れば分かる。

「新しい命の誕生は喜ばしいことだが、時と場合を選べないか？」

「無理無理。新しい精霊の誕生は、私でも操作なんてできないもん」
「だよな…」

精霊ってのは生まれる場所は決まっているが、生まれる時は決まっていない。

生まれる場所は属性によって違い、風の精霊は西にある森、炎の精霊は南にある火山、水の精霊は東にある湖、大地の精霊は北にある洞窟、光の精霊は空のどこかにある浮島、闇の精霊は海の最深部。俺がいるこの森は風の精霊の生まれる場所だ。フィラは新しい精霊が生まれると、問答無用で俺をここに連れてくる。

生まれたばかりの精霊ってのは結構可愛い。

小動物が可愛いって思う気持ちと多分一緒じゃないかと思う。

― にんげんだ

― ほんとだにんげんだ

― めずらしい

― めずらしいね

― どうやってきたんだろ

― にんげんはここにはいれないはずだよ

ちまい精霊達が俺を見てぽつぽつ呟く。

呟くと言っても、声にだしているわけではなく、頭に響くようなものだろうか。

「サクはね、私の契約者だよ」

ゆっくりとフィラが精霊達に分かるように話す。

― けいやくしゃ？

― おうさまの？

― おうさまのけいやくしゃ？

― おうさまけいやくしたの？

― めずらしいね

― おもしろいから？

― けいやくしゃのひと、おもしろいひと？

彼らの言葉で分かると思うが、フィラは風の精霊に王と呼ばれる存在。精霊王だ。

正直最初にそれを聞いた時、俺は全く信じられなかった。

いや、だって、あの性格だぞ？

王って言えば厳格な雰囲気があるもんだと思っていただけに、何の冗談かと思った。

だが、他の風の契約者を遠くからちらっと見た事があったが、俺が使える力とその契約者が使える力には圧倒的に差があった。

今でもちよっと疑う部分がないわけじゃないが、フィラが精霊王である事は理解しているつもりだ。

「うん、サクと一緒にいると楽しいよ」

― たのしいの？

― おうさまたのしいんだね

― おうさまがたのしいとボクたちもたのしい

精霊王ってのは自分の属性の精霊が新しく誕生したら、祝福に来るのが普通らしい。

俺と契約している精霊王という非常識なフィラでも、それだけは忘れない。

突然連れてかれるのは困るんだが、新しい精霊は可愛いし、新しい命の誕生は優しい気持ちになれるからな。

「にしても、同じ精霊なのにフィラとこの子達は色々違うよな」

俺はそう思いながらしみじみと呟く。

― だって、おうさまはおうさま
― おうさまとボクたちはちがう
― おうさまはおうさまだから

理由になってるのかなってないのか良く分からない答えを精霊達からもらってしまう。

この子らにはフィラと自分達が違うのは当たり前なんだろうな。

精霊ってのは高位になればなる程人に近い姿をとれるようになる。フィラも一見すれば普通の少女だ。とびきり可愛いという表現もつくだろうが…。

人と同じ大きさ、人と同じように話ができる、人と同じように物に触れる事ができる。

高位の存在になればなるほど、人とは見わけがつかなくなってくるらしい。

生まれたばかりのこの子らは一番下位になるそうだ。

大きさは手のひらに乗るくらい、瞳の色も髪の色も薄い緑、白い布のようなものを身体に巻きつけてふわふわ浮いている。

言葉は口に出す音ではなく頭に響くような声。その声は同じ精霊か、契約者である人間か、契約者になる能力を持つ人間か、幼い子供くらいにしか聞こえない。

一般的な契約者の契約相手ってのは、大抵この子らとそう変わらない大きさの精霊との契約が多いらしい。

らしいってのは、他の契約者を見た事はあるがほんの数人程度だ。契約者ってのは本当に世界で珍しい存在ってわけだ。

― 王さま、新しい子生まれました…
― あ、生まれてる…！

― 新しい子だ！

― 新しい子！

― あ、サクもいる！

― サクだ、サク！

― あそんで、あそんで！

― あそぼ、あそぼ！

どこからともなく、生まれたばかりの精霊とそう大きさが変わらない精霊達がわらわらと出てくる。

新しい命を祝福するのは精霊王だけじゃないって事だ。

大抵は他の同じ属性の精霊達も祝福に集まってくる。

けど、いくら集まってこられても俺はお前らとは遊ばないぞ！！

「ほら、ごあいさつ」

― はじめまして！

― はじめまして！

― はじめまして！

ニコニコしながら挨拶する新しい子ら。

何度も見てるけど微笑ましいよな！

精霊ってのは大抵生まれる場所に属性の力が濃く集まると誕生するらしい。

一般的には今回のような大きさの子らが生まれるのが普通。

まれに世界の力の流れが何かの拍子で崩れたりすると、大きな子が生まれる事もあるらしい。

高位の精霊ってのは大抵がそうやって生まれるらしいんだが、小さい子が年月を経て力を蓄えて高位になる事もあるみたいだ。

全部フィラから聞いた話で、俺はその過程を見た事があるわけじゃ

ないけどな。

― サク、あそぼ〜

― あそぼ〜よ〜

― かまって、かまって〜

― サク〜

― いっしょに、あそんで〜

挨拶が終わればわらわらと何故か俺の上に降りかかる精霊達。

1人1人はそう重くはないんだが、遠慮というものを知らないのか次々に頭の上や肩の上に乗っかってくる。

「お前ら、重いっつーのっ！」

― 重くないよ〜

― サク、力が落ちた？

― 体力ないのはダメ男だよ？

― そうだよ

― 体力つけないとモテないよ？

― モテないよ？

「余計なお世話だってーの！」

言葉と同時に俺は風で精霊達を吹き飛ばす。

ざわっと風が草を揺らしながら、俺の身体から精霊達が吹き飛ぶ。

重さから解放され小さく息を吐くが、再びぽふっと頭に軽い何かが乗っかる。

― もう、一回〜

― サク、もう一回やって〜

― たのしい―
― もう一度―

吹き飛ばされたことなど気にもせず、再びわらわらと集まってくる精霊達。

いつもの事だ、そう、いつもの事だ。

手加減せずに吹き飛ばせばいいんだろうが、こんなちまい生き物相手に攻撃的な力なんぞ使えるわけがない！

「保父さんみたいだねー、サク」

「笑ってないで、フィラも相手してくれっ！」

「やー、私相手だと皆緊張しちゃうからさー」

― そうそう、王さまだとキンチョーするの

― からだがカチカチになるの

― オソレオオイのー

― サクじゃないとダメなの

完全棒読みの精霊達の声。

嘘だったのが丸わかりだろうがっ！

― サク、あそんでくれない？

― だめなの？

― サクはボク達がきらい？

― あそべない？

一斉に寂しそうな目で見られる。

う、そういう目をするな…！！

俺が悪いみたいじゃないか！

「嫌いじゃないし、遊ぶのは嫌いじゃない…ぞ？」

と言うしかないだろ！

小さな子をいじめてるみたいになるから、非常にいたたまれなくなる。

― じゃあ、あそんで―

― わーい、サクだいすき！

― つづきつづき―

― またやって、やって―

― もう一回―

表情が一瞬でぱっと明るいのに変わる精霊達。

流石フィラと同属性だ。

変わり身が早すぎるぞ。

「頑張れ、保父さん！」

「完全に他人事かよっ！」

「うん」

俺1人に相手を全部任せる気満々のようである。

新しく生まれた子らも、楽しそうなのがわかったのかひよこひよこと近づいてくる。

あゝ…、力加減気をつけないとな。

「日が暮れるまでなら相手してやる！ほら、来い！」

― わーい、サクがいいって

― ぞんぶんにあそべる―

― みんなとびかかれ―

― とびかかれ

― サクをうめちゃえ

― うめちゃえ

「お？わ？へ…だわああああ！ちよつと待てお前らあああ！！」

隠れていた精霊達も一斉に飛び出してきて、本気で俺が精霊に埋もれそうになる。

数が洒落にならんぞ！

この森の精霊全員集まってるんじゃないだろうな？！

と、と、と……まじで洒落にならんぞ！

お前ら、加減くらいしろおおお！！

02-5 <閑話> 契約者（前書き）

精霊とか契約者とかの色々説明。三人称の閑話です。

02-5 <閑話> 契約者

フィラこと、フィルレーラは風の精霊王である。

退屈が非情に嫌いな、風の精霊達を統べる王である。

精霊王とう存在は、勿論風だけではない。

水、火、大地、光、闇、それぞれに精霊王は存在する。

だが、その精霊王は人前にその姿をあらわす事は稀である。

精霊王の持つ力はあまりにも大きい。

精霊王と契約できずとも、その力を我が者にしたいと考える人間はどこにでもいるのだ。

だから、フィラが人間と契約をしたと聞いた他の精霊王達は、その情報を全てともみ消した。

広がらぬよう、人間に伝わらぬよう、フィラの契約者である人間が権力ある者に取り込まれる事がないように。

これは少年が風の精霊王であるフィラと契約をして少し経った頃の話である。

＊

「で、何でオレの所に来てんの？」

「んー、一応断っておいた方がいいかなーと思ってね」

新緑の髪の少女フィラは、燃えるような深紅の髪の青年と向き合っていた。

青年の名はファルシオン、火の精霊王である。

風と火の相性は元々良い。だからなのか、フィラとファルはお互いある程度気軽に話ができる付き合いをしている。

「そーいやー、お前、人間と契約したんだって？」

「別に前例がないわけじゃないでしょ？ 確か光のが2000年前だから人間と契約したとか聞いた事あるし」

「いや、ありゃ、何の因果か光の精霊の加護が面白いほどぴっちりきっちりかかってる珍しい人間だったからだろ？ 普通、王が人間と契約なんて無理だしな」

精霊王の力は強大過ぎて、相性が良い人間であつても人間の方が精神的にも肉体的にも持たずに契約がされないのが一般的だ。

人間は精霊王の存在を知ってはいても、精霊王と契約できる人間がいるなどとは思えないだろう。

「契約しようと思えば結構簡単にできるもんだよ。ちょっと面倒だけどね」

「…面白そうだからやってみるか的な感じでやったんだな」
「うん！」

きっぱりと肯定をするフィラ。

フィラの反応に巨大なため息をつくファル。

「だが、一度契約したら解除は難しいぞ」

「知ってる」

「後で後悔して無理やり解除なんてことになったら、お前への負担

も小さいものじゃなくなるぞ」

「分かってるよ」

再びため息をつくファル。

退屈な事が嫌いな風の精霊王フィラは、楽しいと、面白いと思える事に全力だ。

それによって自分へ何か負担があっても、それを素直に受け入れる。それすら面白いと思ってしまう所もある。

「てか、どうやってお前に相応しい契約者なんて見つけたんだ？オレ達みたいな存在を受け入れられる契約者なんて、そうそういないだろ？」

「契約のやり方をちょっと変えれば相手なんてよりどりみどりだよ」
「やり方？」

現在の一般的な契約方法は2通りと言っているだろう。

精霊が人間の性質などに惹かれて、精霊から契約を持ちかける場合。これに関してはその人間が生まれもった資質が高い場合が殆どなので、特に人間や精霊への影響に関して問題なく契約は行われる。

2つ目の方法は人間が精霊へと契約を呼びかける方法だ。

これはうっかり自分の資質以上の精霊に呼びかけてしまった人間などには最悪死が訪れる。

その為、契約というのはかなり慎重に行われる事が多い。

「自分の力を抑えて契約、徐々に馴染ませていくって方法」

「はあ?!?!」

「力の微妙な制御なんて勿論王じゃなきゃできないから、この方法は王にしかとれないけどね」

精霊としての力を最も下位まで抑え契約し、その契約が馴染むに従

って契約相手の人間が耐えられるだけの力に少しずつ戻していく。しかし、この方法はかなり面倒だ。

一朝一夕で終わるわけもなく、年単位での調整が必要になってくる。確かに精霊王ならば可能な方法だろうが、誰もそんな方法を思いもつかないしやろうとも思わないだろう。

精霊王達は、人間と契約する事にそれ程までの価値を見出していない。

「ちょっとまで。ってーことは、お前の契約相手って……」

「うん。とりえあえず目にとまったその辺にいる少年」

さらっととんでもない事を言うフィラ。

ファルはその言葉に頭を抱える。

「だって、資質がある子って大抵権力絡んでくるような家に生まれてるし、そういうのって動きに制限つきそうで面白くないでしょ？だから、その辺の普通の子を育てた方が色々面白そうだったから」

「それで、フツの人生歩めるようないけな少年の道を無理やり捻じ曲げたわけか」

「えー、人の人生無理やり変えたような言い方しないでよ。一応同意だよ」

「一応か」

「うん、一応」

契約者というのは、基本的に所属している国に「保護」されている。資質がある者はその力をふるったその瞬間から国に目をつけられて引き込まれ、自ら契約を望む人間は、国の上層部の許可なくしてその契約の儀式は出来ない為に国の管理下に置かれる。

契約は、双方が契約において得られるもの、失うものを十分に理解した上で行われるのが通常である。

「好奇心ある少年はウツカリ獣が多い森に行っちゃって、そこにあらわれた私が「契約するなら助かるよ」と契約をね」

「まてまてまてまてー！そんなあっさり風味の契約をしたのか?!」「いやー、だって、あの子ってば契約してとばかりにオイシイ状況になっちゃうから、つい弱味に付け込んだじゃった」

酷い精霊王である。

しかし、それがこの風の精霊王の性格である事を、悲しい事にファルは理解していた。

取りあえずその契約者に内心同情するだけに留める事にする。

「物心つく前の子だと、同意かどうか曖昧になっちゃうかもしれないから、一応物心ついてからの年齢の子にしたんだよ。あと、なるべく幼い方が成長とともに身体に馴染ませる事が出来るから、もしかして完全に契約できちゃうかもしれないし」

「精霊王との完全契約なんかできたら、その契約者は最強になるぞ」「人間の中では、って注釈がつくけどね」

精霊王と契約したからといって、世界最強というわけではない。

精霊王の契約者は完全な契約ができれば、精霊王並にその属性の力を使う事はできるようになるのだが、結局は人間でしかない。

人間と精霊王、どちらかを選べと言われれば、精霊達は精霊王を必ず選ぶだろう。

そして精霊王との完全なる契約者になる事はとても難しい。

前例となっている光の精霊王との契約者も、光の精霊王と同等の力を得る所までは行かなかったらしいのだ。

フィラと契約した相手も、現在は仮契約状態のようなもの。

仮契約で一生を終えるか、はたまた何かの奇跡が起こって完全に契約がなされるかは分からない。

「未知な事に挑戦するって面白いでしょ？」

「面白いかもしれないが、下手したら規模がとんでもない事になるぞ」

「だから面白いんでしょ」

ぐっと拳を握りしめるフィラ。

自分の考えている以上の事が起こるかもしれない事を考えると、フィラは楽しくなるのだろう。

「んでもなあ、その契約者が極悪非道、とまではいなくても、力に溺れるようなヤツになったらどうするんだ？ オレ達の力ってのは、ちよつとだけでもかなり強い方だぞ？」

「あ、それは多分大丈夫だよ」

「何でだ？」

「あの子、炎の属性だから」

びたりっとファルの表情が止まり、少し顔を引きつらせながらもどこか納得したような表情を浮かべる。

「オレが言うのもなんだが、炎属性は比較的単純なヤツが多いからな……」

「うん、だから、成長の方向性を間違えなければ変な考え持たないと思うし」

人間には生まれもった属性というものがある。

資質のある者はその属性の精霊と契約する事ができ、精霊に呼びかけ契約する者は自分の属性の精霊に呼びかけるのが普通である。

そして人間の性格というのは、生まれもった属性に左右される事が多い。

火の属性の人間は単純で純粹で、良く言えば素直だ。

「だから、オレには”断っておいた方がいい”なのか？」

「うん、そう。あの子が成長しても精霊と契約できる資質があるとは思えないけど、火を無理やり風に捻じ曲げるわけだし」

「捻じ曲げるつつつても、風と火の相性はいい方だから、そんな無茶苦茶でもないだろ」

「だから一応なんだってば」

ファルが気にしない事はフィラには分かっていただろうが、自分の属性の人間が別の属性となってしまう事を気に入らないと思う精霊もいるかもしれない。

精霊王同士が話をつけて納得しているのなら、精霊達も何も言わないだろうし何かする事もないだろう。

とはいえ、フィラの契約者が強い火属性を持っているわけではないので、実際何か問題になる可能性は限りなく低かったりする。

「ま、とにかく、オレや他の精霊達に害を及ぼすような事件だけは起こすなよ」

「大丈夫！精霊関係は、相手が何かしてこない限りは手を出す気はないから」

にこっとフィラは安心させるように笑みを浮かべる。

その笑みが何か含みがあるようで不安が残るのだとは、ファルは言えなかった。

風の精霊王フィルレーラは、退屈嫌いな分、それを紛らわす為に策略を巡らすのも好きらしい。

素直で単純な傾向がある火の精霊王であるファルシオンには、フィルレーラの考えている事は完全には分からないだろう。

数年後に、ファイラと少年との契約は完全になされる事になる。
元火属性の少年は素直な少年であり、風の精霊王との契約も、その
力も、そしてその力の使い方もあっさり素直に受け入れたからだ。
それは精霊達の間では小さな噂とはなったが、人間達の間を広まる
事はなかった。
かくして、ひっそりこっそりと、ここに本人の自覚なく最強の契約
者が誕生したのであった。

03 商家の仕事

17歳ともなると、男ならば仕事に就いているやつが殆どだ。

家が商家だったりすると大抵はその手伝いが仕事になるだろう。

商家でもなんでもない家のヤツは、軍へと志願したり、どこか雇ってくれる店をさがしたり、街を離れて村で農家の手伝いをやったりと色々だ。

俺の仕事は実家の商家の裏方。

接客はもとより取り引きなんかは、知識や経験がないとやらせてもらえないので、俺は基本商品の運びこみだ。

後は、ちょこちょこ遠出して商品を受け取りに行ったりなんかする。

幸いフィラに色々連れまわされたお陰で体力にもそこそこ自信はある。

（今日は、これ運び終われば終わり？）

（いや、あと港の方に荷物が届いているらしいから、そっちも取りに行かないとな）

（港ね…、もしかして外とも取り引き始めたのかな？）

（外の国と連絡が取れたような事、ちょっと前に親父が言ってた気がするからそうなのかな）

俺の住んでいる汪秦の首都は、大きな河に面している場所にある。

河を越えて巨大な草原を越えれば別の国になる。

河との反対側にもちらほら小国があったりする。

嬉しいのか悲しいのか、そのあたりにフィラと一緒に行った事がある。

るので、その文化や特色なんかも知ってたりする俺である。

その情報を親父に教えてみたりする事もあるんだが、それが切欠だったのか、それとも別方面から何か情報を仕入れたのか、数年前から親父が外の国に興味を示しているのは知っていた。

（港だとジェスヴィリアだよね…）

（確か、オウシン汪秦と並ぶくらいの大国だろ？）

（2000年くらい続いてる歴史ある大国だね）

どこか意味ありげな言い方をするフィラ。

（何かあるのか？）

（ちよっと、精霊の間でも意見が分かれて特殊な国なんだよね、あそこ）

フィラが言う特殊の意味が俺にはさっぱり分からない。

ジェスヴィリアには何度かフィラに連れまわされて行った事があるが、行ったのは村か森か街道くらいだ。

国外では人の多い所にはあまり行かないようにしている。

人の多い所の面倒事は大抵時間がかかるからだ。

（揉め事起こりそうな取り引き相手なのか？その国って）

（いや、大丈夫だとは思うけど、ある事についての価値観がこの国の人達とは違うと思うんだよね。そこを気をつければ全然普通だろうし）

（なんだ？価値観ってことは宗教関係か？）

（似たようなものかな）

どの国にも宗教ってのは存在する。

大抵精霊を崇める宗教なんだが、その精霊を創った神なんて架空の

存在を崇めてる宗教なんかもあるみたいだ。

ちなみに、精霊ってのは世界が自然に創りだしているの”神様”なんつー意志を持った存在はいないとの事。

少なくとも精霊王達はそう認識しているらしい。

（とにかく港へ行くぞ）

（何か騒動起こるといいね！！）

（不吉な事を楽しげに言うなっ！）

今店の裏にある荷物を運び終えた俺は、兄貴に一言声をかけて港へと向かう事にした。

取り引き先が何でも、取り引きの物が何でも、運営関係に関わっていない俺にはあまり関係しない事だ。

とにかく仕事だ、仕事。

＊

普段頭の中で会話している時フィラはどこにいるかと言えば、ちゃんとすぐそばにいるらしい。

ただ、見えないように存在をかなり薄くしているようで、俺がちやんと力を使えば見えるようなんだが、声も聞こえるし、存在もなんとなくだが感じ取れるので、別に力を使ってまで姿を見ようとは思わない。

そもそもフィラと一緒にいる所を目撃されない為に、フィラと脳内会話をしているのであって、力を使ってしまうえば契約者である事がバレてしまう。

契約者である事がバレれば連行され：いや、別に犯罪者じゃないんだが、扱いは同じようなものだと思っている。

契約者ってのは貴重な存在だから、なんらかの拘束はされるだろう。それで、多分余計な義務とかそういうのが発生するんだ。なんか面倒そうなので、俺はそういうのは正直御免だ。

「^{サクヤ}佐久耶君、こっちだよ！」

港についた俺を、先に来ていた店の人が見つけて場所を知らせるように手を振っているのが見えた。

俺も軽く右手を上げてその人の所に駆け寄る。

「遅くなりました」

「いやいや、^{サクヤ}佐久耶君にはいつも助かってるよ」

「運び込む荷物ってのはどれですか？」

「うーん、実はちょっと扱いが難しいものでね。荷車を使わないで手で運んで欲しいんだ」

「手で？」

「割れモノだからね」

「あゝ、そう言う事ですか」

割れモノというのは大抵が陶器やガラスなどの工芸品だ。

特にガラス細工はこの国では珍しいから、ちっさいものから大きいものまでそこそこ裕福以上な人達に良く売れる。

荷車に積んで運んでも通常は割れたりしないように、ちゃんと布や紙でつつまれて箱詰めされているんだが、万が一ってのがある。

やっぱり商品割れたら損害デカイしな。

「小さいのが多いから何度か往復してもらおう事になるけど、大丈夫

かな？」

「平気ですよ。体力だけが自慢ですから！」

「佐久^{サク}耶君は若いからね」

運ぶ荷物の箱を俺はひょいっと持ち上げる。

意外と軽い…、けど落としたらとんでもない事になるから気をつけないとな。

「夕方までには運び終えて欲しいから頼むね」

「分かりました」

「それじゃあ、私は取り引き先の相手と話をしてくるから、宜しくね」

「はい、任せて下さい」

俺は小走りで店の方に向かう。

港から店までは歩いて行ける距離だ。

小走りで往復すれば、夕方までに十分間に合うだろ。

（あ、珍しい。これってディースの硝子細工だ）

中の商品を風で探らせたのか、箱の中身がフィラには分かるようだ。

（知ってるのか？）

（ディースの硝子細工は昔から有名だよ？綺麗で繊細だからね）

相変わらず変な事に詳しい情報通だよな。

精霊なのにどっから情報仕入れてくるんだか。

商人の親父よりも全然いろんな事に詳しいし。

（どこから、そんな情報仕入れてくるんだ？）

（精霊達から）

（精霊達から？）

（風ってのは存在する場所が、火や水、大地みたいに限定されているわけじゃないから情報収集にはもってこいなんだよ）

そう言うことか。

風ってのは確かに部屋の中とか、外とか関係なく存在する。

洞窟の中でも地下でも空の上でもだ。

つまり、それはどこにでも風の精霊は存在するって事で、その風の精霊の頂点に立つフィラにとってはどこで何が起こっても筒抜けって事になる。

てか、フィラの干渉外の領域ってのはないのかよ。

（情報ってのはどんな時でも武器になるから大事だよ）

（もしかして、盗賊とか山賊とかの情報ってのは…）

（勿論精霊達に聞いた情報）

どこそこに山賊がいるだの盗賊の住処があるだの、どこからそんな情報仕入れてくるのかちょっと気になってたんだが、そう言うことだったのか。

（その気になれば世界征服もできるよ？）

（怖い事言うなっ！）

（えゝ、サクならできるのに…）

（できるとしても、んな恐ろしい事なんぞ絶対にやらん！！）

全く、いつもそうだか恐ろしい事をさらっと言うもんだ。

っーか、本当にフィラは精霊王か？

それともこの世界の精霊王ってのはこんな考え方してるのが普通だったか？

いや、それはそれでもものすごく怖いんだが……深く考えるのはやめよう。

＊

フィラと脳内会話をしながらも、港から店に荷物を全て運び終えるのにあまり時間はかからなかった。
夕方くらいになると思っていたんだが、日が沈むまでまだ時間がありそうだ。

とりあえず他に仕事ないか兄貴に聞いてみるか。

「^{サクヤ}佐久耶ー」

名前を呼ばれて声の方を見れば、兄貴がこっちに近づいてくる所だった。

俺のすぐそばに積まれた商品を見て、満足そうに笑う。

「随分と早く済んだんだな」

「数は多かったけど、軽かったしな」

「おいおい、軽いつてちゃんと丁寧に扱っただろうな？」

「勿論、1個1個手で運んで静かにここに置いたぞ」

「それならよし」

面倒な事は正直好きじゃないんだが、仕事は別だ。

手伝いとはいえ、俺がやってる仕事に対してちゃんと給料ってのは支払われる。

金を貰うってことは、それなりの働きをするのは当然の事だからな。

「兄貴、他に何か運ぶ物とかあるか？」

「特に急ぐものはないな。今日はここで上がってくれ」

「りょかい」

ってことはちよつとの間暇ってわけか。

どこか行くにも時間が足りないし、どうするか。

たまには適当に空を飛びまわるってのもいいよな。

いや、近々フィラに連れまわされる可能性を考えて身体を休めておくべきかもしれん。

待てよ、変に身体を休めたりしたらフィラが”これなら大丈夫だろう”と思って予想以上の厄介事を持ち込んでくる可能性もあるわけ
で…

「^{サクヤ}佐久耶…」

「んあ？」

考え事をしながら歩き出した俺は、兄貴の呼びかけにものすごく適当な返事を返してしまう。

妙に真剣な表情をしている兄貴がまだそこにいた。

って、何だ？

「お前、このままでいいのか？」

………は？

このままって、どういう意味だ？

「何かやりたい事があるんじゃないのか？もし、家の事が心配でそれを我慢しているんだったら我慢しなくてもいいんだぞ」

「いや、別に……てか、もしかして、俺、仕事の邪魔してる？」

「いや、そんなことはない！お前が手伝ってくれて凄く助かってるし、お前がいいならこれからも手伝ってくれると嬉しい。けどな……」
「けど？」

「お前が何か我慢をして、家にいてくれるならそんな必要はないんだってことを言っておきたかっただけだ」

そりゃ、俺のやってる仕事なんて品物の納品なわけで、誰にでもできるような事だ。

俺がいなくなった所で家は困らないだろう。

人が足りなければ誰かを雇い入れればいい。

力持ちでしっかり働いてくれるような人とかな。

「とりあえず別にやりたい事もないし、俺は現状満足だぞ」

「そうか？」

「ああ」

「そう……か」

兄貴はほっとしたような、でもどこか残念がってるようなため息をつく。

まだ何か俺に言いたそうな目を向けてきたが、すぐに諦めたかのように目を伏せる。

「じゃあ、ゆっくり休んでくれ」

「あ、ああ、分かった」

兄貴はそこか寂しそうな表情のまま、店の方に戻っていった。一体なんだったんだ？

俺、最近兄貴に変な事でも言ったか？

そんな覚えはないんだけどな。

（多分昔からのサクの行動のせいでしょう）

…は？

頭の中に響くフィラの声に、俺は思わず顔を顰める。

てか、昔からの俺の行動でなんであんな言葉が兄貴からでてくる事になるんだ？

（何かを思い出したように唐突にどこかに行ったり、昔からふらつといなくなつてちよつとキズこさえて帰ってきたりとか）

いや、それ、全部フィラに付き合わされた事だぞ。

唐突にどこかに行くつてのは、新しい精霊の子が生まれたから連れ去られるように俺もいつしよに森に行つてただけだし。

ちよつとキズこさえて帰ってくるのは、多分盗賊退治かなんかだ。今はもう傷なんて負う事は殆どないんだが、昔はやっぱり傷の1つ2つあったからな。

（でも、なんでそれがさっきの兄貴の言葉に繋がるんだ？）

（うん、だから、それが、日常に不満を持つ冒険好きな少年というように捉えられているんじゃないのかな〜と思うんだよね）

（それで？）

（日常に不満を持つ少年が商家の手伝いで満足なんてするはずないわけで、なにかでかい事やりたいけど家族が心配で出来ない状態だ……って思われてるんじゃない？）

ああ、それで兄貴はやりたい事があるなら気にしないでやれと言いたかったわけだな。

って、それ勘違いだろ？！

俺は別に冒険好きでも、日常に不満も持つてゐるわけでもないぞ！！

（お兄さんが覚悟してるなら、次はやっぱりある程度大きめの事件に関わったりしても面白そうかもね）

（まてええ！兄貴の覚悟があっても俺にはそんな覚悟はないっ！）

（えー、そろそろ大きい事件に首突っ込んでみようよ）

大きい事件って何だ？！

というよりも、フィラからしたら今まで関わって来たのは大きい事件じゃなかったのか？！

俺にとっちゃ、十分大事件だったぞ！

ちよっと一度じっくり話し合う必要があるかもしれないな。

基本、俺が本当に嫌がることはしてこないフィラだが、嫌じゃなくても面倒な事はなるべくしたくない。

気が付いたら引き返せない所までどっぷりつかってたなんて事になりたくないしな！

とにかく、近々兄貴の誤解というおかないと。

04 我が国の王

俺の住む国、オウシン汪秦は絶対王政の国だ。

王政なわけだから勿論王族貴族がいる。

王と4大貴族がこの国の主な権力者と言っているだろう。

と言っても、俺はあんまりこの国の王族貴族の事を知らない。

名前だけは聞いた事あるな的な感じ程度だ。

知っている事と言えば、王族も貴族もそれなりに有名な奴は大抵契約者である事くらいだ。

それから、今の王ってのは悪い噂もあるが一般市民が困らない程度の統治をしてくれているって事くらいか。

ま、一般市民にとっちゃ王とか貴族がどんな人間であつても、自分達が幸せに平和に暮らせれば文句は出てこないもんなのさ。

「サクヤ佐久耶、知ってるか？」

「何をですか？」

荷物運びの休憩時間に、同じ仕事をしている同僚というべき相手に話しかけられる。

俺が家で手伝っているこの荷物運びの仕事は、何人か担当がいる。

俺1人で全部できるはずもないから当然だ。

大抵が俺よりちょっと年上の若い男ばかりだ。

田舎から出稼ぎにきた人ばかりなのだが、皆気さくで気のいい人達ばかりだ。

「陛下の話だよ、我が国の陛下の」

「陛下？」

「その顔じゃ知らないな？」

「知らないのか？ お前」

珍しそうにもう1人の男が俺の方を向く。

現在この小さな休憩場所には3人。

俺と同僚2人だ。

どちらも年上なので、一応は丁寧語を使ってくる。

相手は俺が勤め先の息子だという事は分かっているけど、気を使うわけでもなく気軽に話をしてくるから気分的に楽だ。

「陛下がようやく正妃を迎えるって話だよ」

「しかも、迎える正妃様はジェスヴィリアの王族って話だ」

初耳だ。

というより、俺が色々知らなさすぎなのか？

てか、陛下って正妃いなかったのか？

「正妃になられるジェスヴィリアのお姫様ってのは、光の精霊との契約者らしいぞ」

「しかも容姿端麗、ジェスヴィリアでも評判の優しい姫君らしい」

「羨ましいよな…陛下」

「だよな。年下の奥さんだぞ！ しかも可愛くて優しい！」

くううつと盛大に羨ましがる男2人。

確かに可愛くて優しい奥さんってのは、かなり羨ましい相手なのかもしれない。

けど、俺にとっちゃ王族って所であんまし羨ましいとは思えない。王がどんな人間なのか、貴族がどんな奴らなのかは知らなくても、上に立つ者ってのは色々な義務が生じて面倒そうなのは知ってる。

1度近くの小国の王族関係の事件に関わったの事があるんだが、そ

の時王族とか貴族ってのは大変だなあと心の底から思った。
勿論裏側で関わったただけだけどな！

「けど、何で他国の姫様を迎える事になったんですか？」

オウシン
汪秦は結構豊かな国だと俺は思う。

東西南北の特色で、国の状態がいい具合につり合い取れていると言
うのか、とにかく、なにかに対して他国に頼りきりになるようなも
のもなく、自給自足が十分できる国だ。

他国から誰かをわざわざ娶るような理由が俺には思いつかない。

オウシン
「ほら、汪秦ってどちらかと言えば閉鎖的な国だろ？」

「他国との交流を深めようって意味で、今回のジェスヴィリアの姫
様のお興入れになったらしいぜ」

オウシン
「汪秦とジェスヴィリアの関係があんまり良くないってもあるだろ
うしな」

「仲悪いんですか？」

あれ？確かこの間港から運んだ品物って、ジェスヴィリアのものじ
やなかったっけ？

仲悪いなら取り引きなんて出来るのか？

「俺も噂に聞いただけだから、原因とかは知らないんだけどな」

「ああ、俺も。けど、そのせいで隣合った大国なのに殆ど交流とれ
なかったらしいんだよな」

「何でも30年くらい前が一番酷かったらしいぞ」

「そうそう、王宮では暗殺騒ぎがしょっちゅうあったのかな」

あ、暗殺騒ぎって…、一般市民が知るようじゃ何度もあったんだろ
うな。

暗殺ってのはこっそりやるもんだから、勿論市民の話題に上るような事なんて殆どないわけで、まだ生まれてなかったはずのこの人達が知ってるってことは、当時はかなり騒がれたんだろうし。今じゃ噂にも上らないってことは、緘口令かなんか出たのか。

「お、そろそろ休憩時間終わりだぞ」

「よし、まだまだ頑張るか！行くぞ、佐久耶！」サクヤ

「はい」

のんびり休憩する時間は終わり、仕事再開だ。

よし！と俺は気合いを入れる。

体力勝負のこの仕事、やっぱり始める前には気合いを入れないとな。

＊

俺はちゃんとまわりを見なきゃ駄目なんだとちよっと思った。

というのも、休憩時間に聞いた陛下が正妃を迎えるって話だが、街中をちよっと歩けば色んな人達が口に使っていたのを聞いた。

仕事が終わって、店から少し離れた場所にある実家に帰る途中でそれに関しての噂が耳に入ってきたからだ。

確かに知らない方が変だったのかもな…。

（サクは1つの事に集中しやすいからね）

（悪かったな…）

（別に悪い事じゃないと思うよ）

俺はいじけて部屋の窓の外に目をやる。

外は真っ暗だが星がいくつも空に輝いてる。

店のあたりは、日が沈んでもしばらくは賑やかなんだろうが、家があるあたりは日が沈めば静かだ。

流石に家では静かにしたいって親父達も思ってたんだろう。

「ジェスヴィリアって国はね、昔、光の精霊王との契約者が創った国なんだよ」

突然フィラが姿をふわっと浮き上がるように現わし、俺の隣にぽすんっと座る。

フィラはちゃんと人目を気にしてくれるから、フィラが姿を現すってことは誰もこの状態を見る事はないんだろう。

フィラとしてはちゃんと姿を見せて会話をする方が好きなようで、人目がない時は姿を見せて話をする。

そのあたりが妙に人間っぽいなあと思う。

「精霊王と契約できる人間なんていたのか？」

「現にここにいないじゃない」

「いや、俺の場合は多分特殊だろ？」

「うん、実はものすごく特殊で多分他の精霊王はやらない方法だよ」

だよな。

俺は自分に才能とか精霊と契約する為の資質があるなんて思っていない。

そんな普通の俺が何で精霊王と契約なんてできたかは、詳しい事はさっぱり分からないが、絶対にフィラが何かして契約できるようにしたんだと思う。

そして、それは多分結構面倒で大変な事なんだろう。

でなきゃ、高位の精霊との契約者とか精霊王との契約者が他にもい

るはずだからだ。

「それはいいとして、本当に何がどうなってなのか分からないけど、光の精霊に異常に好かれて資質抜群の人間がいたもんで、光の契約したのが始まり」

「じゃあ、ジェスヴィリアには光の精霊との契約者が多いのか？」

「契約者自体が世界的に少ない訳だから、多いとは言えないけど光の精霊に対する崇拝が異常というか…」

精霊に対して異常な崇拝をする人間はどこにでもいる。

オウシン
「汪秦でも一部の人間は、精霊様々とも言えるような感じの奴らもいる。」

俺にはそこまで崇め奉る理由がよく分からん。

「さてさて、ここで問題」

「は？」

「精霊の属性の中で正反対に位置する属性というのがあります。そこで、光の属性の反対に位置する属性は何でしょう？」

ぴしっと一本指を立てているフィラ。

「光の反対属性は闇。フィラが教えてくれただろ？」

反対属性と言っても、人間に日が差せば影が出来るように表裏一体の存在、それが光と闇。

光が存在する為には闇も存在しなければならない。

互いが互いを必要とする為に、正反対の属性を持つのが光と闇だ。何で教えてくれた本人がそれを聞いてくる？

って、ん？

「もしかして、ジェスヴィリアって闇の精霊嫌ってたりするのか？」
知っていてそんな事を聞いてくるってことは、そうとは思えない。
フィラは困ったような表情を浮かべていた。
こんな顔するのはかなり珍しい。

「2000年も経てば、光の精霊への信仰心が変なふうに変んじやうのは仕方ないとは思うんだけどね」

「だからって闇の精霊嫌うのは違うだろ」

「私もそう思う。別に光のも闇のも仲悪い訳じゃないし。：どちらかといえば私の方が光のとは険悪なんだけど」

「は？ なんか言ったか？」

「ううん、別に」

なんか、恐ろしい言葉を聞いたような気がするが、ここは聞かなかった事しておいた方がいいだろう。

にしても、光の精霊奉って闇の精霊嫌ってるのか。

オウシン
汪秦では、特定の精霊を排除するような信仰心はないわけで、精霊は闇だろうが光だろうが一緒に考えだからな。

ああ、フィラがこの間言ってた”価値観が違う”ってのはそれか。

「けどさ、ジェスヴィリアの姫様がこの国に嫁いでくる事になったわけだから、折り合いがついたんじゃないのか？」

「だいたいけどね。まだあれから30年しか経ってないわけだから、そう簡単になるとは思えないんだけど…」

「30年？」

俺が生まれる前の話だ。

そーいや、仕事場でも30年前が一番酷い時期だったとか何とかって。

この言い方だとフィラは30年前の事を知ってるのか？
俺が不思議に思っていたのが分かったのか、フィラは苦笑する。

「30年くらい前に汪秦^{オウシン}国内でちよつとイザコザがあったんだよ」
「ジェスヴィリアとモメたわけじゃなくて？」

「ジェスヴィリアは全く関与していないよ。ただ、ソルまで引っ張り出されたのがマズかったんだと思う」

「ソル？」

「闇の精霊王」

「はあ?!?!」

精霊王というか、精霊ってのは人間の国に関わっちゃいけないんじゃないかってなかったのか？

何でも、精霊の力は小さな精霊でも人間に比べれば強いものになるから、人同士の争いごとや国の政なんかに口を挟んだり、口を挟む権利を得るような事はしてはいけないというのが暗黙の了解らしい。これはフィラと契約する時に最初に教えてもらった事だ。

精霊が人間同士の事に口出しできるのは、自分の契約者がそれに関わった時だけ。

「そんなこんなで闇の精霊を敵視するジェスヴィリアにとって、闇の精霊王を招き入れた国なんてとんでもないという事で、しばらく暗殺騒ぎが続いたりしてね。王が闇李^{アンリ}になってからは落ちついたらしいけど」

「闇李^{アンリ}？」

^{オウシン}

「闇李・汪秦。この国の王の名前だよ、サク。自分の国の王の名前くらい覚えようよ」

「き、聞いた事はあるぞ!…多分」

「まあ、本人は自分の名前を知らない人間に呼ばれるの好きじゃないみたいだから、覚えなくてもいいかもしれないけどね」

だから、街でも皆”陛下”とか”王”とかって言うのか。
王の名前って聞く事ないもんな。

「ジェスヴィリアの信仰心の強さは、30年経ったから仲良くできますよ〜なんて軽いものじゃないと思うんだよね」

「ってことは…」

「十中八九、なにか裏があるんだろうね」

やっぱり、そうなるよな…。

最も、裏がない国の違う身分がある人間の婚姻ってそもそもあるのか？

身分があるってことは政略結婚も普通だろうし。

政略結婚ってのは大抵裏があるだろうし。

「それか意外と物事は単純で、^{アンリ}閻李の正妃をそろそろ決めないと年齢的にどうだろうねえ、と考えた国の重鎮がたまたま探した出したのがジェスヴィリアの姫だった、なんて事だったりね」

「陛下ってそんなに年じゃなかった気がするんだが…」

即位が確か俺が生まれてちょっと経った頃だったはずだ。

今度の王は随分と若いものだって噂してたから、十数年経ってもそんな年寄り爺さんってことはないだろう。

「いつまでも正妃の座を空にしておくわけにはいかないってことでしょ。未だに後継ぎもいないわけだし」

「世継ぎか…。大変だよなあ」

身分がある人間の苦労なんて想像もつかない。
大変なんだろうな〜と思うくらいだ。

ま、俺が考えても何が変わるわけでもないしな。
隣国の姫様が来ようが、光の精霊や闇の精霊が関係しようが、何事も起こらなければそれでいいさ。

05 隣国のお姫様

ジェスヴィリアの姫様の入国は盛大に行われている。

本日首都入りするらしいお姫様、陛下の正妃になるという話だったんだが、正確には正妃候補らしい。

陛下と姫様が互いに話をして、気が合えば正式に結婚となるそうなの。政略結婚っぽいのに、自分の意志で選べる選択肢が残されているとは、決めたのが誰かは分からないが随分と寛大なんだなあと思ってしまう。

政略結婚って問答無用じゃないのか。

（うわゝ、賑やかだね）

（国中で大歓迎って感じだよな）

俺は今、例の姫様の王宮入りの歓迎の様子を見ている。

街の一番大きな通りを姫様が通る専用にし、その周囲は歓迎する市民で溢れてる。

歓声と風に舞う花びら、かなり華やかだ。

しかし、人ごみに押し込まれてまで姫様を見たいとは思わない。

俺は街道沿いの屋敷の屋根の上にいる。

勿論風の力で、自分の姿が分からないように幻覚使ってる。

誰とも知らぬ屋敷の主さん、屋根の上お借りします。

風の力ってのは結構色んな事が出来るから便利だ。

（あれが、噂の姫っぽいね）

（あの派手な馬車か？）

姫様ご一行行列の中央あたりに、やたらとキラキラしている馬車がある。

その馬車を囲むように馬に乗った兵士が多数でよく見えないが、その馬車に噂の姫様が乗っているんだろう。

にしても、やたらキラキラしてるよな。

俺の表現力じゃどうにも説明ができないんだが、まぶしいっつーか、いや、ちゃんと武装はされていると思うぞ。

ただ…、ああ、そっか。

あの鎧とか服とか、暗い色を殆ど使っていないのか。

（闇の精霊嫌いだから、暗い色とか使うのも嫌だったりするもんかな？）

（あ、気づいたんだね、サク。うん、そう。歪んだ信仰心というかなんというか、徹底しているというか…）

フィラの声が完全に呆れたようなものになってる。

確かにここまで徹底してれば呆れるよな。

って、お？ちよっと姫様の姿が見えてきた。

長いさらさらの金髪で、背はちよっと小さめか？

確か俺と年齢があまり変わらなかったよう…：

（サク？）

っ…！！ひ、久々に見惚れそうなるほどの可愛い顔だ。

ちよっと恥ずかしそうに浮かべてる笑顔とか、いいよなあ。

こう、なんというか護ってあげたい雰囲気があるっつーか。

（サク！！）

（うおあ？！はい！）

思わずびしりつと姿勢を正してしまう俺。

（見惚れてたね）

（あ、いや…）

（あの子に見惚れてたでしょ）

（…：ちよ、ちよっただけ）

はっとするような可愛い顔だし、ちよっと見惚れていたのは認める。けど、あの顔に見惚れない男がいはいはがいない！あれは誰もが求める可愛らしさだ！

（確かに人間にしては可愛い子だとは思うけどね！もっと可愛いのがここにいるでしょ！）

（…：普通、自分でそれを言うか？）

（言う！だって、私は可愛いもん！）

いや、確かにフィラはとびきり可愛い。

最初見た時見惚れた俺は、うっかり契約して今に至ったりしているわけだしな。

けど、可愛いのか美人とかってやっぱり見慣れるんだと思う。

今は見惚れる事なんてなかったりするからな。

（あの姫様に見惚れたってのは、可愛いと思ってその顔を見たわけじゃないから衝撃的だったってだけだよ）

（ふん…）

（本当だって）

（じゃあ、あの子に何か頼まれてもひよいひよい気軽に引き受けないでよね）

（別に気軽に何か引き受ける気はないよ。というより、そもそも俺とあの姫様の接点なんてゼロなわけだから、なにか頼まれるような

機会自体がないと思うぞ)

一般市民と国王陛下の正妃のどこに接点ができるんだか。
今日この日、姫様の顔を見るのが多分最初で最後だろうさ。

(あ、そーいや、あの姫様って契約者なんだろう?)

街中で流れている噂の中で、姫様の公開されているだろう情報が飛び交っていた。

ジェスヴィリアの第三王女であり、光の精霊との契約者。

(うん、そうだね。しかも、結構高位と契約してる)

(分かるのか?)

(あの子の近くに小さい子供がいるでしょ?)

(うん?)

姫様のすぐそばに、姫様の腰くらいの背の子供がちょこんと存在している。

真っ白い髪に、真っ白い衣装、髪に隠れて目の色は見えないが、見事なまでに真っ白な存在だ。

けど、存在感があんましないよな?

(一応軽く姿が見えないようにはしているみたいだから注目してる人少ないけど、あれが契約相手の精霊)

(精霊なのか。一応普通の人間っぽく見えるぞ)

(だから高位の精霊なんだよ。ま、私からすれば高位って言っても大した力じゃないと思うけどね)

(そりゃ、フィラから見ればそうだろうよ)

精霊王の力ってのは他の精霊に比べて圧倒的らしい。

その属性全ての精霊を従える王なのだから、高位の精霊と比べてもその力の差は圧倒的。
だからこそ、精霊王との契約者なんてのが殆ど現れないわけなんだよな。

（なんか見る限りじゃ、フィラとは話合わなそうな感じだな）

光の精霊を雰囲気で判断するってのも何だが、あの精霊は賑やかな事とか騒動とかを面白いと思わないような気がする。

俺だって騒動が好きってわけじゃないんだが、全部が全部嫌ってわけじゃないんだよな。

口にすれば最後、休みなしでとんでもない事に巻き込まれそうだから絶対に言わないけど。

（合わないそうじゃなくて、絶対に合わないよ）

（断定かよ）

（光と風の属性の相性が悪い訳じゃないんだけど、どうも、私の性格とは合わないんだよね、光って）

（属性の相性は悪くないのか？）

（ないよ。風と一番相性いいのは火だけど、光はその次に相性いい属性だからね）

風は火を強化でき、火は燃えさかる事で風を起こす事も可能。

だから火と風の相性ってのは抜群にいい。

もし、俺が火の契約者と一緒に息の合った攻撃でもすれば、多分効果は倍どころじゃなくなるんだと思う。

実際やったことはないが。

（風の子の中で、光の子と仲良い子もそれなりにいるわけだし）

フィラの言う”子”ってのは、あのちまい精霊達の事だ。
あの大きさなら確かに”子”だしな。

（フィラの性格と合わないってことは、光の精霊って真面目だった
りするのか？）

（真面目って言うか：いや、確かに真面目なんだけど、融通が利か
ないというか適当な事があまり出来ないというかね）

（あー：なんとなく分かった）

フィラのやり方とか考え方が光の精霊にとっては気に入らないもの
が多いんだろうな。

確かに正攻法とは言い難いやり方多いしな。

（どっちにしろ、関わる事なんてないだろうから、モメる事もない
だろ）

（だといいんだけどね）

（その言い方は俺を巻き込む気なのか？！巻き込む気なのか？！）

（何もしないよ）

（ほ、本当か？）

（疑り深いなあ：、大体私が権力関係の事件に表立って首突っ込む
ような事、あんまり好きじゃないって知ってるでしょ？）

（ああ：）

俺が今こうして一般市民のままでいられるのは、フィラが権力に関
わる事が好きじゃないからだ。

ちよっと権力ある、例えば近くの小国の王族とかなんかの事件に面
白そうだからと関わろうとしても、フィラは裏方で関わるという前
提条件をつける。

いや、ちよっと待て。

（裏からこっそり関わらせようとか思ってた…）

（ないよ。大体、なにか起こるとしたら精霊巻き込んだ事件になるから、裏からこっそりではできるか分からないわけだし）

（フィラ得意の暗示とか幻術とか使えば大丈夫じゃないか？）

（私は万能ってわけじゃないんだよ）

おお？！フィラにしては珍しい。

何が起きても基本自信溢れるような態度ばかりだったのに。

（やっぱ、姫様の契約者が高位の光の精霊だからか？）

フィラにとって正面から戦えば相手にならなくても、高位の精霊を完全に誤魔化しきることはできないんだろうか。

（私が誤魔化せないって思うのはそっちじゃなくてあっちだよ）
（あっち？）

フィラの意識が王宮の方に向いているのが分かった。

姫様じゃなくて王宮？って何でだ？

（汪秦^{オウシン}の王、閻李^{アンリ}はね、この世界ではかなり珍しい風と闇、2属性の契約者なんだよ）

（2属性?!）

基本契約者ってのは、契約精霊の属性は1つだ。

資質がある契約者ならば、精霊2体と契約する事もあるらしい。

だが、2属性の契約ってのは契約精霊の相性もあるからかなり難しい。

精霊の方からの働き掛けもなく2属性の精霊との契約が出来るってのは、相当資質がある上に努力しなけりゃ無理なんじゃないんだろ

うか。

流石この大国の王様というべきか…。

（風の契約者ってのは、同じ風の契約者の存在を比較的感覺取りやすいんだよね）

（けど、フィラの方が確実に陛下の契約精霊より上位なわけだから大丈夫なんじゃ…）

（いや、私じゃなくて誤魔化せないのはサクだよ）

（俺?!）

（私1人ならどうでも誤魔化せるけど、サクって正直すぎるからねえ…、いくら私でもサクの怪しすぎる言動誤魔化せるのは数回くらいかな）

た、確かに俺は感情が表に出やすい。

悲しい事に、誘導尋問されてそれに引っかからないとは言えない。

（にしても、陛下に対して随分と高評価なんだな）

（そりゃ、姿見えなくしてるはずなのに、声かけられたりすればね）
（は?）

（何度か王宮に忍び込んだ事があるんだけどね。確実に姿は目に見えていないはずなのに、経験と勘なんだと思うけど私の存在感じとって声かけられた事があるんだよ）

（お、お前、王宮につて!!）

（大丈夫だって。闇李^{アンリ}は私の事は通りすがりの精霊^{アキラ}なんだと思ってるはずだから）

通りすがりの精霊ってことは、そのあたりを気まぐれに漂ってる精霊ってことだろう。

風の精霊ってのはフィラと一緒に気まぐれなのが多いから、王宮だろうが森だろうが火山の中だろうが、結構ふらっとどこにでも現れ

るものらしい。

(大丈夫！闇李アンリと契約してる闇と風の精霊にはきっちり脅しかけて、精霊王だって事言わないように約束させたから)

(脅したのかよ?!)

(あ、違った。説得だよ、説得)

(今更言い方を変えて何か違いがあるのか?)

つか、たまにどっか行く事あると思っていたんだが、そんな事もしてたのか。

てっきり、俺を巻き込みやすそうな事件を自分で探しに行っていたんだと思ってたんだが、そればかりじゃないのか。

(闇李アンリは人間にしては、その場の判断力とか感知力がかなりズバ抜けてるからね)

(∴俺はどうせ単純でヘタレだよ)

確かに陛下は凄い人なんだろう。

この大国をある程度問題なく治められているわけなんだから。

それは分かるけど、やっぱり男としては他の男をベタ褒めされるのは、あんまり気分がいいもんじゃないんだよな。

(サクは単純でヘタレている所がいい所だと思うよ。そういう所が風の精霊達に好かれてるわけだし)

(はあ?)

(精霊ってのは闇李アンリみたいな腹黒じゃなくて、基本的にサクみたいな裏表ない単純な人間の方が好きなんだよ)

(陛下を腹黒って∴)

(実際腹黒だよ。見事なまでに真っ黒だから。外から見てる分には面白いんだけど、正直契約者にはしたくないよね、ああいうタイプ)

心の底から嫌そう言っているみたいだから、本当に嫌なんだろう。
分からんな。

天から二物も三物も与えられたような人間と関わる方がいいと思う
んだが、このへんは精霊と人間の違いなのか。

どっちしにても、精霊に好かれるのはありがたい事なんだと思って
おこう。

単純ってのが褒め言葉かどうかは別としてな。

06 姫様の警備隊

ジェスヴィリアの姫様が王宮入りして十数日経つ。

街中は未だに大歓迎の雰囲気が残っていて、賑やかだ。

今日は仕事が休みで、なおかつフィラが持ち込む厄介事もない。
俺はのんびりと街中を歩いていた。

つと、なんだ？

そこそこ人通りが多い通りのある一角に、わらわらと人が集まっているようだ。

なんか、面白いものでもあるのか？

俺はいそいそとそちらの方に向かう。

：っていかん、最近フィラに毒されてきたかもしれない。
と思いつながら好奇心は止められない。

えっと、なにになに。

人だかりの中心にあったのは1つの立て札。

そこにある事が書かれている。

ティラシエル様の近衛兵募集？ティラシエル様ってのはこの前来た
姫様の名前か？

この国の人間の名前ってのは、他の国から見たら変わっているらしいんだが、俺からすれば他国の人間の名前の方が発音しにくくて変わってると思う。

まあ、それはとにかくとして、”ティラシエル”という名前はこの国の名前じゃないだろう。

という事はやっぱり、この間来た姫様の名前か。

（確か自国の兵士だか騎士だかを何人か連れてきてなかったか？）

（大半は見送りでジェスヴィリアに帰ったと思うよ。残ってるのは数人だろうね）

（そうなのか？）

（自国兵士大量に残しておいたら変に思われるでしょ。かといって、警備をザルにしておくわけにもいけないから、この国内で募集してるってとこかな）

にしても、何でこんな一般市民の通りに立ててあるんだ？

しかも、応募条件がかなり厳しいし。

貴族の推薦が必要って、そりゃどこの馬の骨とも知れないヤツを雇うわけにはいかないんだろうが、こんな一般市民が通るだけの街道にこんな知らせ立てた所で、募集できるやつなんているのか？

（素人集めた所で大した戦力になんかならないだろうに、何で軍から何人か引き抜いて警備隊作らないんだ？）

（さあ？ 国の事情ってやつなんじゃない。ま、でも、ド素人を雇うつもりはないようだよ）

（は？）

（ちゃんと選考試験があるみたいだしね）

あ、本当だな。

実技の選考試験が何回かあるみたいだ。

そりゃそうだよな、取りあえず雇ってみたいはいけど、剣も握った事ありませんってのじゃ困るだろうし。

ちなみに、俺は剣なんて使えないぞ！

体術ならある程度強いとは思うんだが、武器はちゃんとした師に教えてもらわないと変な癖がつくからやめておくようにとフィラに言われたからだ。

「佐久耶サクヤじゃないか」

「兄貴？」

ぼやっと人ごみの一番外側に立っていたら、兄貴が歩いてくるのが見えた。

何でこんなところにいるんだ？

「今、丁度取り引き先から店に戻る途中なんだ」

「そうなのか」

「佐久耶サクヤは今日休みだろ？何見てたんだ？」

「ああ、これ見てたんだよ」

俺は人に囲まれてここからは良く見えない立て札の方をちらっと見る。

兄貴はそれが何のか興味があるように背伸びをして覗き込んでいた。内容を読んではっとした表情をしたが、すぐに表情を引き締める。

何だ？

この近衛募集ってのは、もしかして商売に影響するかもしれない事なのか？

「やっぱり、佐久耶サクヤはこういうのに興味があるのか？」

「いや、そう言うわけじゃないけどな」

「けれど、これに受ければ一気に出世だね」

「ま、そうだろうな」

正妃直属の近衛だ。

身分的にもかなり高い地位になるんじゃないかと思う。

「佐久耶サクヤは応募しないのか？」

「貴族の推薦なんてもらえないだろ？だから、無理無理」

「そうか…」

兄貴は何か考えるように下を向く。

最近俺と話をすると、ちよつと考え込む事が多い兄貴。

知らない所で何か心配でもかけちまつてるか？

風の治癒を覚えてからは、傷とか残さないようにしてるから大丈夫だと思うんだが…。

「兄貴、店に戻らなくていいのか？」

「あ、ああ、そうだな」

「何か話があるなら、また今度聞くとよ」

「そうだな、そうするよ」

ひらひらつと手を振って俺は兄貴を見送る。

俺と違って兄貴は休みなんて殆どない。

経営者みたいなもんだから仕方ないだろう。

やっぱ、兄貴、疲れてるのか？

俺ももうちよつと色々店の手伝いができるようにちよつと勉強でもしてみるかな。

（ねえ、サク）

（うん？）

（さっきの言葉）

（さっきの言葉？）

（ほら、募集するかどうかで聞かれて答えた言葉）

（何か変か？だって、貴族の推薦なけりゃ無理なのは本当だろ？）

（そうだけどね、サクのその言い方だと、貴族の推薦があれば本当は行きたいって思ってるのも取れるよ）

（…は？）

えーっと、待てよ、待てよ、ちょっと待てよ。
俺、否定っぽいこと口にしてたか？

いや、全然してなかったような。

ということは、兄貴に盛大に再び誤解を植え付けたって事…なのか。
のああああ！！

俺は別に刺激的な毎日が好きってわけじゃないんだ！近衛になりた
いとか思っていないんだ！

いや、もう、これは、早い所、兄貴の誤解を解かないとマズいよな！

＊

日が暮れていつものように家に戻る。

仕事で忙しい両親を待つことなく、俺は適当に夕食を食べる。

簡単なものなら自分でも作れるので、さっと作ってさっと食べる事
にする。

食べ終わってがしやがしやと適当に食器を洗っている所に、両親達
が帰ってくる。

今日は帰ってくるの早いなあ。

「ただいま、^{サクヤ}佐久耶」

ひょっこり厨房に顔を出したのは親父だ。

「おう、お帰り親父。何か作るか？」

「いや、母さんがお客様からもらったものがあるって言ってたから
な」

「そうか。何か必要な食器とかあればついでに持ってきてくぞ」

「それなら、箸と皿を何枚か頼む」

「了解」

洗い終えた食器を置いて、俺は両親と兄貴達の箸と食器を用意する。確か漬物残ってたから、一応持っていてみるか。

「なあ、佐久耶^{サクヤ}」

「あ？」

てっきり部屋の方に戻ったとばかり思っていた親父がまだそこにはいた。

妙に真剣な表情をしている。

突然親父は、どこに持っていたのか分からないが、紙切れ1枚を俺に向かって差し出してきた。

「何だこれ？」

俺は何の疑問も持たず親父からその紙切れを受け取る。

たいして大きくもなくその紙には、簡単な一文と署名捺印があった。許可証かなんかっぽいよな。

特にこの捺印なんて貴族の印っぽい……って、なんでだああああ！！

「お、おや、親父いい？！！」

って、何で近衛兵応募の許可証なんて俺に渡してくるんだ？！偽物か？！偽物か？！それとも偽造か？！

「とにかく、落ち着け佐久耶^{サクヤ}」

「なんだ、親父。さっそく渡したのか？」

親父の後ろからひょっこり兄貴が現れる。

「いいか、佐久^{サクヤ}耶。言っておくがそれは本物だ」

「ほ、ほ、本物お？！」

「商売上、貴族様の知り合いもいてな、お客様の貴族様に一筆書いていただいたんだ」

「あの方は佐久^{サクヤ}耶の事も知っているしな」

「あ、兄貴…？」

え？え？貴族のお客様って何だ？

いや、落ち着け俺。

商家なんだから、貴族と取り引きしてもおかしくないだろ。

つまり、貴族のお客様がいるのはおかしくないわけだ。

よし、ここまではいい。

で、問題はこれだ。

俺は手にしてしまった紙をまじまじと見る。

「お前、やりたい事もやらないで黙々と家の仕事手伝ってるだろ？」

「兄貴？」

「本当はそういうの懂れているけど、言いたくても我慢してるんだろ？」

「は？」

何の事だ？

俺は自分の気持ちに比較的正直に生きてるつもりだぞ。

そもそも嘘なんてつけない性格なわけだしな。

「佐久^{サクヤ}耶が仕事を手伝ってくれるのは助かっている。このまま手伝

いを続けて、ゆくゆくは利希也リキヤを補助してくれるようになってくれればいいと、私は勝手に思い込んでいた」

「親父？」

「だが、利希也リキヤに言われて気づいたよ。お前はそんな一介の商家の手伝いなんかで満足するような性格じゃないもんな」

「佐久耶サクヤは昔っから、良くどこかに行っちゃ傷をつくって帰ってくるような冒険家だったからな」

いやいやいやいや！勝手に話を進めないでくれ。

俺は満足してる。

今のままで十分だぞ！

「近衛の募集があつたつてのも運命かもしれないからな。だから、佐久耶サクヤ」

「行つて来い！本当のお前はこういう道を選びたかつたんだろ？」

ぼんぼんっと肩に親父と兄貴の手が乗せられる。

俺は許可証を持ったまま呆然とするしかない。

親父も兄貴も呆然とした俺を気にせずに、厨房から満足そうに出ていく。

（見事に自己完結していつちやつたねえ）

ま、まてえええい！！

何なんだこの展開は？！

（考え方が単純つてのはサクの家系なのかな？）

（単純とかそういう問題じゃないだろ？！いつ、俺が、近衛の募集に応募したいなんて言ったよ？！）

（それはサクの日頃の言動が問題なんだと思うよ）

（俺？俺が悪いのか？！）

（全く否定しないで、誤解されるような言い回しもしていたわけだしね）

確かに兄貴の誤解を解かなかったのは俺が悪い。

俺と同じ年頃のヤツなら、姫様の近衛なんて憧れの職業なんだとも思う。

けどな、けどな、俺は、俺は…！

近衛兵なんて恐ろしい職業なんかに応募したくないんだああ！！

（日々の積み重ねって大事だね、サク）

ああ、そうだよな。

本当に心の底からそう思う。

けどな、けどな、フィラ！

今それに気づいたって遅いと俺は思うんだ。

06 姫様の警備隊（後書き）

次は三人称の閑話になります。

06-5 <閑話> 利希也(前書き)

お兄さん視点三人称の閑話です。

06-5 <閑話> 利希也

利希也リキヤは佐久耶サクヤの兄だ。

3人兄弟の一番上の長男であり、生まれた時から家の仕事を継ぐのは決まっていた。

幸い利希也リキヤには商才があり、父の仕事を継ぐのに十分な知識と経験を着実に備えていった。

可愛いお嫁さんもらい、これで男の子が生まれれば文句なしに幸せなんだろうと利希也リキヤ自身思っていた。

だが、最近の利希也リキヤには心配事が1つある。

それは三男である弟の佐久耶サクヤの事だ。

17歳の佐久耶サクヤはすぐ下の次男と違って、真面目に家の仕事を手伝ってくれる。

”国一の農家になってやるうう！”と叫んで飛び出して行った次男とはえらい違いだ。

しかし、利希也リキヤは次男よりも佐久耶サクヤの方が先に家を出ていくのではないかと思っていた。

佐久耶サクヤは昔から随分と元気な子だった。

外に友人と一緒に遊びに行つては、必ず傷の1つや2つをつけて帰ってくる。

子供は元気なのが一番だという事で、両親はそれを決して咎めなかった。

利希也リキヤという長男の後継ぎがいたため、次男三男には自由でいて欲しいと思っていたのだろうか。

とにかく佐久耶サクヤは元気だった。

次男よりも元気な三男。

これだけ元気で暴れまわるのが好きな子だから、将来は家の仕事なんて手伝わずに家を飛び出してどこかにでも行ってしまおうのだろうと思われていた。

その思いとは反対に、佐久耶サクヤは自然の流れであるように家の仕事を手伝いだした。

しかも、その仕事内容には文句の1つもなく黙々とこなす。

だが、幼い頃のように外に遊びに行く事がなくなる事はなかった。

休みの日は両親や利希也リキヤが知らない場所まで行っているらしく、思いつめた表情で帰ってくる事もあった。

何か急用を思いついたかのようにどこかに行った時は、その日の夜に空を眺めている事が多い。

―― お前、今のままで本当にいいのか？

両親も利希也リキヤも何度か佐久耶サクヤにそう言おうとした事がある。

だが、両親達に見せる佐久耶サクヤの表情は、いつも通りの何もないかのような表情ばかり。

本音を両親達に見せようとしないう佐久耶サクヤに、どう切り出しているのだろうか。

何か切欠があればと思うのは、利希也リキヤも両親も同じなのだろう。

＊

「父さん、佐久耶サクヤは？」

「今日はジェスヴィリアの姫様が来るって事でそれを見に行つたよ

うだよ。何か頼みたい事でもあったのか？」

「この間の荷物の数の確認を一応しようと思ってな。そっか、いないのか」

商品の運びこみ。

その仕事はとても大切な仕事だが、つまらない仕事だと若い人ならば辞めていく事が多い。

佐久耶はその仕事を楽しめるかのように、いつも笑顔で仕事をしている。

「けど、やっぱりジェスヴィリアの姫様を見に行っただな」

「あの子がこの手の祭りを見ない訳がないだろう？」

「そうだよな。あいつは昔から祭りとか好きだったからな」

「こっそり行っても、嘘をつくのが下手だから行った事はすぐバレるしな」

父と利希也リキヤは互いに顔を見合わせて笑い合う。

昔の佐久耶サクヤの事を思い出しているのだろう。

本当に賑やかで楽しい事が好きで、好奇心旺盛で、それでいて優しいのだ。

「あの嘘が下手な所は、取り引き相手との駆け引きには全然向かないよな」

「というより、父さん。佐久耶サクヤにお客様を相手にさせるってのは多分無理だ。特に性格的に」

「商才が悲しい事はないんだよな…」

「仕方ない。向いてないのは向いてないんだしさ」

長男には商才があった、次男三男には商才がなかった。

だが、次男は体力に自信があったからなのか、田舎の方に行き農業

に励んでいるらしい。

噂ではかなり優秀な農家になりそうだとかなんとか。

「あの子は何になりたいんだろうな」

「俺は情報を取り扱う職業なんか向いていると思うな。佐久耶サクヤって昔からどこから聞いてくるのかわからないけど、色んな事知ってるし」

「ああ、そうだったな。ジェスヴィリアの事なんかこの辺の商人以上上に詳しいしな」

つい最近からジェスヴィリア産の商品も取り扱うようになってきた。それを取り扱うと思ったのは、佐久耶サクヤが語る他国の事をよく耳にしていたからだ。

随分と正確で広い知識だと感じるほど、佐久耶サクヤは色々な事を語った。

「やっぱり、どこかの隠密系かな？」

「そういう系になるな。何しろ……」

「佐久耶サクヤは正確な情報収集はできるけど」

「それを使うのは下手だしな」

悲しい事に商才がないのと同様に、情報を集める事ができてもそれを上手に扱う事ができないのが佐久耶サクヤなのである。

しかも、本人はペラペラと両親達にその情報を話し、それがかなり重要な情報である事を自覚していない。

「隠密か……。隠密は別にいいんだけどな、利希也リキヤ。お前、佐久耶サクヤが強いかどうかって知ってるか？」

「仕事中、港でごろつきに絡まれた時は、あっさりそれを撃退していったってのは聞いた事があるけどな」

我が弟ながら、謎な事が多いと利希也リキヤは思う。

だからこそ、こんな一介の商家の手伝いで終わるような人間ではないはずだ。

もっと広い世界へ、この街の外でもいい、国を出てもいい、この小さな商家の中にいるのではなく、他の所に行ってみるべきだと思うのだ。

「なあ、父さん」

「何だ？」

利希也リキヤはずっと考えいた事がある。

きっとそれは、目の前の父も同じだろう。

「佐久耶サクヤには自分のやりたい事をやってもらいたいと思っている」

佐久耶サクヤと同じ年ごろの子は、軍へ志願したり、街を出て次男のように自分の道を見つけたりしている。

佐久耶サクヤも本当はそうしたいんじゃないだろうか。

こんな平凡で、変わり映えのない日々を送っている事はつまらないと感じているのではないだろうか。

「父さん。もし、佐久耶サクヤがやりたい事をやる為にこの店を辞める事になっても…」

「できる限りの援助をして送り出してやる！」

「だよな」

2人の考えている事は同じである。

家族が何かをやりたいのならばそれを最大限に援助する。

それは当たり前的事であり、家族に対して我慢する必要なんてないのだ。

— だから、佐久耶^{サクヤ}。お前はお前の道を行け！

＊

ジェスヴィリアの姫が入国してからしばらくして、姫の警護である近衛兵の募集がかかった。

対象は訓練を受けた傭兵や貴族だけではなく、身分を問わないとの事。

ただし、貴族の推薦が必須である。

— 佐久耶^{サクヤ}は応募しないのか？

— 貴族の推薦なんてもらえないだろ？だから、無理無理

利希也^{リキヤ}の言葉にそう答えた佐久耶^{サクヤ}。

全然興味がないかのような返答に思えたが、しかし、その言葉は逆に言えば推薦があれば応募できただろうに…という思いが込められていたようにも感じる。

家の仕事は商家だ。

大きな商家でもないが、小さな商家でもない。

取り扱っている商品の中には、この国でも珍しい商品もある。だからというのか、取り引き先には貴族もいる。

利希也^{リキヤ}は佐久耶^{サクヤ}の為に動いた。

勿論父も動いた。

取り引き相手とはいえ、貴族の推薦をもらう事は難しいだろう。だが、利希也リキヤが頼んだ貴族は快く推薦状をだしてくれた。日頃の何気ない会話の中に、佐久耶サクヤの事を混ぜておいたのが良かったのかもしれない。

佐久耶サクヤは商家の仕事ではなく別の道も歩める。

その一步がこの許可証だ。

利希也リキヤは、佐久耶サクヤが近衛の試験に受かるなどとは思っていない。

これがきっかけとなり、自分の道を歩んでくれるようになればいいと思っただけだ。

佐久耶サクヤが望む、佐久耶サクヤだけの道を。

両親も利希也リキヤも、佐久耶サクヤはずっと我慢しているのだと心の底から思い込んでいた。

好奇心旺盛で行動力があるとみられたどこかに行って傷をつけて帰ってくるのは、フィラに連れまわされて盗賊や山賊相手と戦わざるを得なかったからである。

お祭りが好きで、お祭りがあれば仕事を休んでそこに行くのは、フィラが賑やかな事が好きで行くのを強制されているからである。

他国の正確な情報をあっさり手に入れてくるのは、実際その国へとフィラに連れまわされて行き、その場で聞いた事を重要だとも思わずさらくと話しているからである。

全てが誤解というわけではない。

実際佐久耶は、楽しい事は好きだろうし、好奇心もそれなりにある、そして結局は冷徹になりきれずにフィラの頼みは全く断れない優しい所もある。

だが、平和でほのぼのした日を望んでいるのが真実であり、決して近衛兵の募集に応募したいなどとは全く思っていないのである。

しかし、過去の行いと言う”実績”がある以上、そのちょっとした誤解が解ける日は来ないのかもしれない。

07 選考試験1

よく考えてみれば、応募したからと言って受かるわけじゃない。

貴族の推薦状もらって親父と兄貴達に好意的に送り出された時は、日々の自分の言動に後悔したもんだが、受かる可能性の方が低いんじゃないかと思直したわけだ。

多分無理言ってお得意様に推薦状とか書いてもらったはずだから、これを無下にするわけにもいかない。

というわけで、俺は今、王宮内で行われている近衛採用試験会場にいる。

落ちついて考えれば、受けるくらい別に大した事ないんじゃないかと思う。

どうせ、落ちるだろうしな。

（結構人数いるもんだな）

（貴族達が自分達の力の誇示の為に、何人か子飼いを送り込んだんでしょ）

（あ、なるほどな）

試験会場、と言っても王宮内の軍の訓練場かなんかだと思うんだが、そのデカイ庭にいるのはかなりの人数。

一体何人いるんだ？

100は越えてるんじゃないか？

（サク）

（おう、気づいたぞ）

突然、南側に強い存在感が現れる。

実際は突然現れたんじゃないで、そこにいたヤツが覇気みたいなものを発して存在感を増したんだろうと思う。ちよつとざわついていた周囲が一気に静かになる。

「これより採用試験を開始する！」

俺からは姿は見えないが、試験官らしい人間の声が聞こえた。同時に周囲に緊張感が走る。

「試験は3次試験まで行う予定だ。1次試験はいたって簡単、地下に適当に獣を放つてある、その獣を1匹以上倒してくる事だ。証拠として持ってくるのは何でも構わん、牙でも目でも脚でも首でもなんでもな。ただし、他人が倒した物を盗んだヤツは失格にする」

王宮に地下なんかあるのか。

それもこの人数が入るってことは結構大きいよな。

確かに王宮自体はかなりでかいから、この分の大きさの地下って言えばかなりでかいんだろうが。

「制限時間は正午までだ。合格者のみ昼食後、午後から2次試験開始となる。何か質問がある者はいるか？」

その声に質問は上がらなかった。

というか、妙にざわついているんだが、思ったような試験内容じゃなかったってことか。

俺としては最初から筆記じゃなくて良かったと心の底から思ったぞ。別に落ちるのは構わないんだが、流石に最初で落ちたらカッコ悪いというかな、うん。

「質問がないなら、試験を受けたいと思う者だけここに並べ。地下

へ案内する」

ざわつきながらも、並ぶ人間が8割くらいだろうか。

あの言葉を聞いて試験をやめようって思った連中はもしかして、最初から野次馬根性でここに来ただけなのか。

そんな事を思いながら俺は、列の最後の方に並ぶ。

人数が減ったとはいえ、近衛兵にするにはこの人数は多いだろう。

（契約者も何人かいるみたいだね）

（フィラ？）

（精霊連れてる子が何人かいるよ）

前方の方に並んでいる奴らに目を向ければ、肩や頭に何かふよふよ浮いているのがいたりするヤツもいる。

ああ、あの辺の奴らは契約者なわけか。

フィラの姿は隠しているし、同じ契約者でも俺が契約者だってバレル事はないだろう。

今のフィラの姿が見えるのは、フィラと同等以上の力を持つ者、つまりは精霊王とその契約者でないと無理ってわけだ。

お陰で俺は、普通にしていれば契約者だってバレル事は絶対じゃない。

（にしても地下ね）

（知ってるのか？）

（一応ね。面白い迷宮になってるよ）

（は？迷宮？）

（そう、迷宮。地下で暗くて前がよく見えないってのもあるから、入った事ない人は結構迷いやすいよ）

（ってことは、この試験って…）

（獣を倒す事が試験じゃなくて、迷宮の中に入って無事出てこれるかって事でしょ）

暗い、知らない道、出口にたどり着けるか分からない恐怖。
そんな状態で冷静になれるヤツなんて相当経験積んでないと無理だ
と思う。

（でも、このくらいなら、サクは全然楽勝だと思うけどどうする？
道案内ならできるよ）

（頼む。取りあえずは、やれる所までやってみようと思う）

（お、前向きだね。サクにしては珍しい！）

（珍しいって…。どうせ、途中で落ちるんだろうし、ちょっとは頑
張ってみようと思ったただだよ）

（何で落ちるの？）

（何で俺が受かるんだ？）

俺は契約者ではあるけど、一応一般市民だぞ。
貴族お抱えの訓練された人間と比べられちゃ、普通は勝てないだろ。
って、フィラ、ため息ついたのがなんとなく分かったぞ。

（とにかく、頑張れ、サク。私にできるフォローはするから）

（おう！）

（どっちにしても、サクは近衛兵にはならないとは思うけどね）

（なんだよ、フィラはやっぱり俺が落ちるって思ってるんじゃない
か）

俺が受かるって前提で話してるっぽかったから、ちょっと嬉しかっ
ただけだな。

年中一緒にいれば、俺の実力はお見通しってわけか。

（うん、そうだね。そういう事にしておいて）
（はあ？）

何が言いたいのか良く分らん。
とりあえずは、一次試験くらいは突破するぞ！
風の力があれば迷宮なんて、迷宮の意味がないようなものだからな。
問題は獣がどれだけの強さかってことなんだろうけど、…そーいや、
俺、武器何にも持ってないぞ。

＊

地下への入口は頑丈な扉だった。

入口で貴族の推薦状と名前の確認、武器が必要なら貸し出しもする
って事で、一応小刀を1つ借りておく事にした。

しかし、貸出武器ってものすごく色々な種類があったんだが、あれ
を使う人間がいるのか？

中には暗殺者専用の武器とかもあったぞ。

俺が武器に詳しいのは、やっぱりこれもフィラに教わったからだ。

山賊や盗賊の中にも、色々な武器使う奴がいたからな。

知っていれば対処ができるってわけだ。

「次の方々、お入り下さい」

地下へは一定時間ごとに十数人ごとまとめて入っていく。

入ってすぐに協力を持ちかけたりしてるヤツもいたが、当然俺には
何の声もかからない。

どうせ、見た目弱っちい一般市民だよっ！

（サク、こっちから行こう）
（了解）

同じ時間に入った奴らから、ひそひそと声が聞こえる。
獣の一撃で死にそうってなんだ！悪かったな、弱そうでっ！自覚してらっつーの！

（ほらほら、サク。あんなのは放っておいてさっさと行こう。下手に知らない人と一緒に行動するより、1人の方が気楽だよ）
（それもそうだよな）

俺は今まで誰かとつるんで行動するって事があまりなかったりする。多分、戦う中での協調性を求められたら全然駄目だと思う。フィラがそういうのを嫌うってのもあるんだろうけどな。にしても、本当に薄暗いよな。かろうじて、所々にある火が明かりになってるから見えなくはないんだけどさ。

入口から奥に入っていくと、入り組んだ道になっている。分かれ道があちこちに見えるが、俺は迷わずフィラの言う方向に進む。

これじゃ、俺は方向感覚ある方じゃないから、奥まで行ったら入口の方向分らないだろうな。

（にしても、フィラ。誰もいないみたいだから姿見せても大丈夫なんじゃないか？）

（人はいないけど、見てる人はいるよ）
（見てる人？）

（だって、試験中に死人が何人も出たら色々マズいでしょ？これは

風の契約者だね、所々で観察してる)

風の力を使えば、このくらいの広さは観察できる。

俺もやろうと思えばできるが、頭の方がその処理をしきれないから広範囲観察はあまりやらない。

一度やったら、頭が痛いなのって。

けど、言われてみれば、風の気配がちよっと変っつーか、所々規則的だもんな。

「さて…」

俺は歩くのをやめて、その場に立つ。

先に続く暗闇をじっと見つめて待つ。

気配を感じたからだ。

人の気配ではないもの、そう獣の気配。

ゆっくりと近づいてくるそれに、俺は警戒心を悟らせないようにゆっくりと構える。

のそりつと暗闇から姿を見せたその姿は狼だった。

見た事もないような獣でない分ましなだろう。

なんだろう…が！

「でかっ！！なんだよ、このデカさ！」

色も毛並も、耳の数も目の数も口の数も普通の狼と同じだ。

その大きさだけが明らかに違う。

普通の狼の3倍くらいの大きさだろうか。

その目に宿るのは、腹をすかせた野生の狼と同じ狂気。

風の力は分からないように使わなきゃならんよな。

隠ぺいもしなきゃならない使い方って、神経使うから面倒なんだよ

な。

ま、非常識な大きさでも相手が1匹ならば、俺が油断しなきゃなん
とかなるだろ。

— があああ！！

狼が地面を蹴って俺に襲いかかってくる。

つか、こんなデカイ狼どこから連れて来たんだよっ！！

ガラ空きの腹に、見ている人間が分からんように少し風をまとわせ
た拳を叩きつける。

と同時にメキメキっと、ヤな音が聞こえた。

命を奪う瞬間ってのは、相手が人間でなくてもあまり気分がいいも
んじゃない。

俺にできる事は、苦しみを長引かせずに一瞬で決着をつけてやる事
くらいだ。

腕の力が強い訳じゃないんだが、やり方によっちゃかなりのダメー
ジを与える事ができる。

どさりっと地面に転がった狼は動かなくなる。

それをじっと見ながら気配を探るが、生きている気配はない。

ほっと小さく息を吐く。

とりあえず、なにか身体の一部を持ってかなきゃならないんだよな。

まるごと持っていくのは重量的に無理。

首だけは、生々しいから俺が嫌だしな。

目はくりぬかなきゃならないのが面倒なのと、呪われそうな気がす
るから嫌だし…無難に牙か？

てか、牙ってどうやって取るんだ？

（サク、借りた刀使ってみるといいよ）

（刀？小刀か？）

（貸出してた武器は、獣の部位を取るくらいの切れ味はあるだろうし）

（んじゃ、使ってみるか）

けど、武器持っていかなかったヤツとかはどうすんだろ。

事前に獣の一部を持ち帰れて言ってるわけだから、何も持っていかなかったヤツはそれだけで状況判断不足で失格って事か。

根性あるヤツなら、丸ごと引きずって戻るかも知れないけどな。

ごそごそしながら、牙をどうにか取る。

小刀借りておいて良かった。

すぱっと切れたわけじゃないが、小刀ないと手が獣の血で大変な事になってたしな。

さて、後は入口に戻るだけなわけで…ん？

「どわあっ?!!!」

ひゅっと何かが横切ったかと思えば、ぼわっと俺が倒した獣の身体が炎に包まれていた。

炎を囲むように、きゃいきゃいと喜んでるように見える火の小精霊。

（他の人が、別の部位を持っていけないように燃やしちゃうんだろうね）

（やる事が細かいな）

（そうでもしなきゃ、ズルする人がどうしても出ちゃうってことでしょ。ズルして合格した人間なんてたいして強くないわけだから、受かってもらっちゃ困るだろうし）

勢いよく燃えていく獣の身体。

普通火で燃やしてもこんなに一気に燃え上がらない。

火の精霊が燃やしているから、短期間で一気に燃え尽きてしまうんだろう。

ちなみに、火の精霊の火ってのは通常の火とは違うらしい。

何が違うのか良く分からないが、とにかく違うらしい。

火属性じゃない俺には良く分からない。

一応狼が燃え尽きたのを見届けてから、入口へと戻った。

先に何人かすでに戻ってきてる奴らもいるようで、他の奴らの獲物の証拠らしきものが並んでいるのが見えた。

中には首を持ってきたヤツもいたようだ。

平然と首持ってくる奴なんているんだな。絶対に近づきたくないが……。

正午までの時間、合格した人数は応募人数の半分ほどになっていた。迷宮から抜け出せなかったのか、運悪く獣と遭遇しなかったのか、獣と遭遇しても倒せなかったのか分からないが、不合格者は迷宮から回収された後、そのまま家に帰されるらしい。

08 選考試験2

正午も過ぎ、昼食の休憩も終わったところで試験開始である。
とにかく、出してもらった昼食は美味かった。

やっぱり王宮が用意するだけのものはあるよな。

手掴みで食べられるようなものでも、やっぱり材料と料理人が違うと
味も違うよな！

貴族付きなんかやってるヤツらには珍しくもないものだろうけどさ、
一般市民にはご馳走なんだ。

「二次試験は一次より簡単だ。俺に触れる事が出来たヤツから合格
だ」

ニヤリッと笑みを浮かべているのは、一次試験説明した人の声だ。
ガッチリ体形の赤い短髪の男。

あれ、どっかで見た事あるような気がするんだが…。

「知らないヤツがいるかもしれないねえから一応名乗っておいてやろう。
俺は廉・炎秦^{レン エンシン}。対一とは言わねえ、一気にかかってきな！」

げっ！道理で見た事があるわけだ。

炎秦^{エンシン}って言えば大貴族様のうち1つで、俺の住んでいる炎秦区^{エンシンク}を統
括してる貴族様じゃないか！

しかも炎秦^{エンシン}を名乗ってるって事は確実に直系だろ？！

炎秦^{エンシン}の直系って言えば、確か火の精霊の契約者。

確実に廉^{レン}：様も契約者なはずで…ああ、そーなるよな。

思いつきり楽しそうな笑みを浮かべながら、廉^{レン}様は炎を自分の周囲
に纏う。

はつきりいって、普通の人間じゃ近づけもしないだろう。

この二次試験に残った契約者以外の人間は、ぎょつとした表情をしながら固まっている。

そーだよな、普通はあんなに近づきたくないよな。

廉^{レン}様の周囲はぐるっと炎が発生してる。

まさに発生してるって表現が正しいと思う。

地面の草が全く燃えてないと見ると、精霊の炎なんだろう。
触れて大火傷する事にはならないはずだ。

（サク、どうするの？）

（うーん、どうするか）

俺はかなり迷っていた。

あの炎が火傷するようなものじゃないつつつても、多分熱いには熱いはずだ。

その熱いは、多分我慢しようと思えば我慢できる熱さなわけで、炎を越えて相手に触れる事くらいは別にできるんじゃないだろうか。

お、1人かかっていった。

多分同じ火の契約者だよな……って、あ、あっさりはじかれた。

炎^{エン}秦^{シン}一族は好戦的なのが有名で、武人の一族だ。

つまり、炎をどうにかできた所で、廉^{レン}様の一撃で撃退されるのが目に見えているわけだ。

（触るくらいだったら、サクだったら楽勝だと思うよ）

（俺を過大評価しすぎてるぞ、フィラ）

（そうかな？だって、あの人の攻撃ちゃんと見えてたでしょ）

（ああ、一応な）

剣先で薙ぎ払ったわけではなく、剣の柄をつかって弾き飛ばす。

一応なるべく怪我をさせないはしてるんだな〜と思った。

（楽勝とは言わないが…）

（できる？）

（触る事くらいなら多分な）

さて、やってみるか。

俺は地面を蹴って、廉様^{レシ}へと一気に向かう。

向かってくる俺が分かったのか、廉様^{レシ}は俺を見るとニヤリっと笑った。

他のヤツらは様子を見ているのか、近づこうとはしない。

その方がいい。

下手に誰かが加わると、予想通りに事が運ばなくなるかもしれないから困る。

「正面から来るか！いい度胸だ！！」

ごうっと廉様^{レシ}の周囲の炎が勢いを増す。

普通ならその炎で突っ込むのをためらうと思う。

だが……悪意のない精霊の力は害にはならない！

俺は迷いなく炎の中に突っ込む。

一瞬驚いた廉様^{レシ}だったが、すぐに面白そうだと言いたげな表情を浮かべ、剣を振りぬく。

って、はやっ！！

ひゅつと頭上で剣先が空気を切る音が聞こえる。

あっぶね…！

今の、本気で振りぬいただろ？！

とっさにしゃがんだ俺は、そのままの勢いで飛び上がる。

人間の脚力ってのは鍛えれば結構すごくなるもんだ。
風の力を使わなくても、俺は一応人1人とはとび越えられる脚力はある。

しゃがみこんだ勢いで飛び廉^レ様の頭に右手をのつけて、くるんっと一回転。

おっし、着地成功！

とうおっ?!!

気配がしてとっさにしゃがみこむ。

再び頭上で剣先が空気を切る音が聞こえた。

「って、何するんですか?!」

俺、ちゃんと触ったぞ！触ったよな?!

触ったら合格なんだよな?!

その後、攻撃されるのは普通なのか?!

「わりい、つい…な」

つい…じゃないだろう!!

絶対に口に出して言えないが、一応内心で叫んでおく。

油断してたら、俺、完全に真っ二つだったぞ。

「だが、良く分かったな」

「何がです?」

「俺のこの火は熱くないっての」

今の俺は、ごうごうと燃え盛る炎の中に平然と立っている状態だ。
ちよっと熱いと思ったほどじゃないし、服も燃えてないし、火傷もしてない。

「だって、これって精霊の火じゃないですか」

「ああ、俺の火だな。だが、普通の火と同様、火傷させる事もできるモンだぞ？」

「ですが、悪意のない精霊の力ってのは害にならないでしょう？」

この炎に害意は感じられない。

害意のある火、攻撃的な精霊の力というのは殺気のようなものがあるからすぐわかる。

このくらい契約者なら普通知ってるものだろう？

だから、最初に廉様^{レシ}に攻撃したのは契約者だったわけだろうし。

「はー、成程な。お前、取りあえず合格だから、後ろ下がってな」
「?…はい」

取り合えず言われた通り、廉様^{レシ}から何歩か下がった所で見学する事にする。

俺という合格者が出てきたからなのか、他の奴らのやる気が増したかのように廉様^{レシ}を一斉に睨みつけている。

この人数で一斉にかかってこられたら、運よく触れる事が出来るヤツもいるんだろうな。

にしても、廉様^{レシ}楽しそうだな。

火の契約者って好戦的というか、戦い好きな人が多いって聞いた事あったな。

なんか、段々剣先の速度が増してるような気がするんだが…手加減してる、よな？

俺、最初に合格して正解だったかもしれん。

「夢中になるのもいいが、適度に手加減はしろよ、廉^{レン}」

静かにこの場に響いたその声に、俺はぞくりっと悪寒が走る。

気持ち悪い声ってわけじゃないし、多分声だけで判断するならば、威厳ある低い声なんだろうとは思う。

けど、なんつーか……恐い？

絶対関わりたくないような気がしたのだ。

ゆっくりと声の方を振り返ってみれば、この試験会場を眺めるように見える王宮の廊下に何人が立っていた。

結構離れているんだが、良く声が届いた……あ、風か。

立っているのは3人、黒髪の男、金髪の男、金髪の女の子……あ、ジェスヴィリアの姫様だな、あれ。

さっきの声だしてたのは、黒髪の男だろ。

どう考えてもこの人の声だ。

姿から感じる雰囲気とさっきの声の雰囲気が全く同じだ。

風を使っただけで事は、風の契約者なわけだよな。

うあ……！

じっと俺が見ていたのが分かったのか、ばちっと視線が合ってしまった。

少々引きつる表情を自覚しながら、俺は笑みを浮かべて深く頭を下げる。

こんな王宮に姫様と一緒にいるんだから、身分は高い人だろう。

（サク！！）

フィラの声が頭に突然響き、その言葉の意味をすぐ理解して顔をぱっと上げて右手を前に突き出す。

どんっと強い力がかかるが、それを風の力でねじ伏せる。
って、突然何だ?!

風の壁に遮られた向こうにあるのは闇の力の塊。

おいおい、なんだこりゃ…。

風の力で囲みこんで、闇の力を圧縮させてから霧散させる。

ざあ…と吹きぬけた風の後には、特にさっきと変らない光景。

えっーと、何だったんだ？

とりあえず傷は何にもないし、あのくらいならばどうにかなるからいいんだけど、突然理由もなく攻撃するのは勘弁して欲しい。

あー、黒髪の人が姫様に何か非難されてるみたいだ。

ってことは、あの人がやったのか。

何故に？

ちょっと待てよ。

あの人は確か風の力を使って声を届けたわけで、俺にぶつけてきたのは闇の力のわけで、2つの属性と契約できる人間なんてそうそういないんだよな。

…も、もしかして、あの人って。

(あれが汪秦王^{オウシン}の闇李^{アンリ}だよ)

や、やっぱり、陛下ですか、あの人…じゃなくてあのお方は。

王だけあって、雰囲気というか迫力が違うよな。

お？ 姫様が廊下から降りてこっちに向かってくる。

後ろからもう1人の金髪の男もついてくる。

金髪男は姫様のお付きか？

少し息を弾ませながら姫様は俺の前に立つ。

遠くから見ても可愛かったが、近くから見ると一段と可愛いよな。

愛らしいというかなんというか。

けど、一度見て耐性はつけたから見惚れるような無様な事はしないぞ。

「あなた、大丈夫でしたか？怪我とかは…」

「いえ、大丈夫ですよ」

陛下の攻撃で俺の怪我を心配してくれたのか。

やさしーなあ。

安心させるように俺は姫様にこっと笑みを向ける。

「陛下は何を考えて、あなたにあんな力を向けたのでしょうか」

「闇の力を持つ者の考えなど、我々には分かりませんよ、姫様」

「そう…ですね」

すうっと目を細めて陛下の方を見る金髪男と、微妙な表情の姫様。

俺はその光景にざわりっと胸がざわめく。

嫌な予感とかじゃなくて、なんて言ったらいいのか分からないが、とにかく妙な感じだ。

そわそわするっつーか、ここにあまりいたくないっつーか。

「あなたは、契約者なのですか？」

「は、え、はい」

つい、肯定してしまったああ！！

「良かったです、あなたが契約者で。でなければ、あなたはあの闇の力に飲み込まれてしまっていたかもしれないから」

「しかし、風程度に防がれるとはあの王の力も大した事がなさそうですね」

「ジャスティ！」

「これは、失礼。この国に住むあなたにとっては、自分の国の王でしたね」

なんだ、コイツ。

感じ悪いなあ。

つか、陛下は絶対に手加減したと思うぞ。

「風は光と相性が良いと聞きます。あなたが、ジャスティの下で私と共にいて下さるようでしたら、心強いでしょう」

姫様はにこりつと金髪男を見る。

つまりこの金髪男の名前はジャスティという名前な訳だ。

げえ！！試験受かったら、このヤなヤツの下に行かなきゃならないのか？！

うあ…、合格する気が一気に失せたぞ。

しかも、ざわざわした感じが消えないしなあ。

なんつーか、姫様は可愛いんだが…こう、な？

「姫様、風は補助を得意とする力ですから、そう期待はしない方がよろしいかと」

「そうですか？攻撃的で物騒な力よりは良いと思います」

マジでヤな野郎だな、コイツ。

「そろそろ、あの王のもとに戻りましょう。2次試験も終わりそうですしね」

「え、ええ。それでは、また」

にこりつと微笑む姫様に俺も笑みを返す。

陛下のもとに戻る姫様達を見て、俺は思わずほっと息を吐く。
うん？…あれ？なんで、あんな可愛い姫様が離れて安心するんだ？
緊張していたのもあるんだが、それも違うような…。

（サク）

（うん、何だ？）

（アイツをボコろう！）

（は？）

フィラが言うアイツってのは、感じの悪い金髪男の事だろう。
確かにむかつく気持ちちは分かる。

俺も気分悪かったしな。

（”風程度” おって？そんなに馬鹿にする風の本当の力を見せてや
ろうじゃないの！）

（おーい、フィラ？）

（あいつの契約精霊ごとこの世から消してやろうじゃない！）

（まてまてまてまてー！！さりと物騒な事言うなああ！！）

（別に物騒じゃないよ。本当の風の力を知らない愚かな人間に真実
を教えてやろうっていう親切心だよ、サク）

（それが、親切心なわけあるかあああ！！）

分かるけどな、憤る気持ちは分かるけどな！

それやったら絶対にマズい！

国交問題にまで発展するっての！

とにかく、落ち着け、フィラあああ！

09 選考試験3

2次試験を通過したのは、恐ろしい事に全員契約者だった。
契約者って珍しいんじゃないのか？

いや、ここまで揃うと、そうでもないような気がしてくるぞ。

なんとかフィラを言葉でなだめて、俺は他の2次合格者と一緒に横
一列に並ぶ。

列から少し離れた所に腕を組んで見守るように立っている廉^{レン}様、そ
の隣にどこか楽しそうに見える陛下も立つ。

俺達の前には姫様とヤな感じの金髪男2人だ。

「最終試験は私が担当致します。私はジェスヴィリア王宮騎士、ジ
ヤステイ・リズ・ジークルトと申します。この試験に合格しました
方々は、私の下について姫様をお守り頂く事になります」

金髪男は綺麗な笑みを浮かべてるんだろうが、この場では絶対逆効
果だ。

何しろ合格したのはほとんどが男。

ほとんどってのは、中性的な顔立ちのヤツもいるから、性別どっち
か良く分からんヤツもいるからだ。

んで、モテる顔立ちの男ってのは、基本性格がとんでも良くない限
りは同性からは嫌われるもんだ。

いや、だって、見てもムカつくだろ？

顔がいいってだけで女の子が集まるんだぞ！

男なら誰もが一度は夢見るだろう可愛い女の子に囲まれる状況…そ
れを顔がいいってだけで成しえるのは腹が立つ以外の何ものでもな
いだろ。

「最終試験は、私が引いたこの線…」

金髪男はすつと腰の剣を鞘から抜いて、ひゅつと振りぬく。
ざんつという音とともに、地面に綺麗な線が一本引かれる。

うお、王宮騎士って名乗るだけあるな。

精霊の力使うの上手い。

普通、剣を振りぬいただけで地面に線が描けるわけがなく…中にはその普通じゃない事をやらかすヤツもいるが…精霊の力を使って地面に傷をつけていた。

「この線から、私と姫様がいる所までたどり着く事。何の事はない、ごく簡単な事です」

俺達が並んでいる場所から線の引いてある所までは、あっという間の距離だ。

走っていけば、瞬き3回くらいしているうちに着いてしまうだろう距離。

「勿論、多少の障害はありますが…、精霊の使い手である真の契約者の方々でしたら簡単な障害ですよ」

なんだ？真の契約者ってのは。

精霊との契約者を契約者って呼ぶのは分かるけど、精霊の使い手とか真の契約者なんて聞いた事ないぞ。
ジェスヴィリア特有の表現か何かか？

「ですが、その前に…」

金髪男がその場で抜きみの剣をゆっくりと上げ、ひゅつと振り下ろ

す。

さっきと同じで光の精霊の力を：

「つづあああ！！」

叫び声とともに1人、その力で吹き飛ばされる。

おいおい、ちょっと待て！

加減とかしてないよな、今の。

吹き飛ばされたヤツは、結構離れた場所の塀にぶつけられたようで、塀の所で土ぼこりが上がってる場所が見える。

塀に勢いよくぶつかったら、痛いなんてモンじゃ済まないぞ。

骨の一本二本くらい絶対に折れる。

何考えてるんだ、コイツ…。

「姫様は闇を嫌いますから、闇の方には退場していただきました」

にこりつとやった事が何でもない事のように笑う金髪男。

ああ、確かに吹き飛ばされたヤツには闇の精霊がついてる。

精霊が心配そうにふよふよしてるって事は、生きてるってことだよな。

けど、精霊がすごく心配そうにしてるってことは結構酷い怪我のはずだ。

俺はこっそりとそいつが倒れているだろう所に向けて、癒しの力を使う。

「では、始めましょう」

金髪男が光に包まれる。

同時に、俺達受験者全員が金髪男の方から強い圧迫感を感じたはずだ。

ある程度強い精霊ってのは、その存在感がすごい。

人間は、その存在感を圧迫感としてとらえるらしい。

フィラもその気になれば、そこに立ってるだけで人間も精霊も動けなくなるくらいの存在感ってのがある。

それなりに強い精霊と契約しているんだろう金髪男はそれを解放しただけだ。

存在感に圧されて動けないヤツ、なんとか足を踏み出しているヤツ、色々いるが俺は動かないでいた。
別に動けないわけじゃない。

このくらいならフィラに比べれば大したことない訳で、やろうと思えば普通に走って向こうに行く事だってできる。

俺は吹っ飛ばされたヤツの方をちらつと見る。

それから姫様の方もちょっと見る。

姫様は金髪男がやった事なんか気にしていないように見える。

まあ、命を狙われるかもしれない自分を守る人間は強い方がいいんだろうから、金髪男に簡単に吹き飛ばされるようなヤツじゃダメなのかもしれないわけで、金髪男を咎めないのは分からないでもないけどなあ…。

あー、なんつーか。

とにかくヤなんだよな。

姫様を守るヤツを選ぶ試験なんだろうけど、それに受かった所で姫様を守ろうって気分になれるのか、守ろうと思う気持ちを持ち続けられるか分からない。

1人2人と、ゆっくりとだが金髪男の合格線を越えるヤツらが出てきている。

途中でばったり倒れてしまうヤツ、俺みたいここから動かない、

動けないでいるヤツもいえる。

（サクは動かないの？）

（動かない……でいると思う）

（何で”思う”なの？）

だよな。

迷ってるってのが事実であって、このまま不合格ってのもちよつと勿体ないと思う俺もいるわけだ。

だが、元々受かるなんて思っていなかったから、ここで落ちた所で別に悔しい気持ちも殆どなかったりするのも事実。

（あの金髪が気に入らないなら、ボコって下剋上すればいいんじゃない？）

（まてまてまて！）

どーして、お前はそうやって物騒な思考に行くんだ！

（試験、終わっちゃうよ？）

（まあ、いいさ）

（サクなら軽く合格できたのに？）

（元々、受かるって思ってたし、どうしても受かりたくて試験受けたわけでもないしな）

半ば押し付けられたように受けたわけだし。

苦勞して手に入れてくれただろう推薦状だろうが、親父も兄貴も俺が受かるなんて思っちゃいないだろう。

そもそも、だ。

俺がプロの襲撃者なんかと向き合った所でまともに太刀打ちできるとは思わんし。

こういう護衛の仕事は向かないと思うんだよな。

「試験はここまでとします」

金髪男の終了の声が響く。

線を越える事ができたのは4人。

「彼ら4人を合格者とし、明日より私の部下とします。よろしいですか？」

金髪男がにこりっと笑みを向けたのは陛下にだ。

「届出を出しておけ、今日中に受理するよう言っておく」
「お願い致します」

陛下に頭を下げはしたものの、絶対に敬っていないだろう事が分かる。

陛下もそれは全く気にしてないようだ。

姫様は合格したヤツらの所にかけてよって、精霊の力で癒しを与えていた。

圧迫感で消耗した体力や精神力を回復してるんだろう。

癒しが本当に必要なのは、ふっ飛ばされたヤツなのになぁ…。

姫様に癒されながら金髪男に何か言われながら、姫様とヤツらがそのままこの場を離れていくのが見えた。

これから、申請とか準備とかするんだろうな。

気がつけばそろそろ日が沈みそうな時間だ。

結構短時間で終わったように思えるが、それでも時間はかかったんだろう。

「何故、合格できるのにしなかった？」

唐突にそれでいて思ったより近くで聞こえた声に、思わず俺はびっくりとなる。

少々顔を引きつらせながら陛下の方を見てみれば、思ったより近くにいて、俺の方をじっと見ている。

こ、こわっ…！

「お前ならば、あの線を越える程度の事できただろう」

何故って、ここでなんとなく…って言っているもんか。

「何？もしかして、コイツって自分の意思で合格蹴ったのか？」

興味深々とばかりに陛下に気軽に聞いている廉様^{レン}。

陛下にそんなふうに話しかけられる廉様^{レン}はある意味すごいと思う。

俺には絶対に無理だ。

「隠れて癒しの力を送ってたという事は、余裕があったということだろう」

「癒し？」

「そのヤツにだ」

陛下が視線を向けたのは、ようやく立ちあがる事ができるほどに回復した吹っ飛ばされた闇の契約者。

てか、何でバレてんの？！

属性が風って事で、一応隠蔽類は得意だと思ってたんだが、何で分かったんだ？！

「アイツの精霊ってそこそこ強い存在感だったのに、それに耐

えて癒しの力まで使う余裕があったのか」

「風の癒しの力は制御がそう簡単ではない。更にそれを見えぬように隠して見せたのだからな」

い、癒しって難しいのか？

俺、結構契約してからすぐの頃に覚えたぞ。

フィラも癒しの力覚えないと後で大変だから早く覚えろって言うたし。

「名は何と言う？」

「さ：佐久耶^{サクヤ}と申します」

って、言い方でいいんだよね？！

いいんだよね？！

敬語なんて殆ど使わないから、陛下に対する言葉遣いなんて分かんぞ！

「出身は？」

「炎秦区^{エンシンク}です」

「炎秦区^{エンシンク}か…」

陛下はちらつと廉様^{レン}の方を見る。

廉様は陛下に軽く肩をすくめるような仕草をする。

それが何を意味しているのか、俺にはさっぱり分かん。

「あー、もしかして、あの子に付けるつもりか？」

「コレは闇精霊を嫌っているようには見えないからな」

「けど、あの子はちよつと特殊だろ？」

「駄目なら消せばいいだろ」

廉様^{レン}がものすごく呆れた表情をする。

コレって俺のことですかね？

しかも、ものすごく物騒な言葉が聞こえたのですが…。

消すって、消すって、消すって？！

陛下^{レン}と廉様の視線が同時に俺へと向けられる。

に、睨んでないってことは分かるんだが、睨まれているような気分になる。

「佐久耶^{サクヤ}と言ったな」

「は、はい！」

「ついてこい。あの姫の警護兵よりもいい仕事をお前にやろう」

いやいや、俺は警護兵みたいな仕事はやったことがないわけで、それよりいい仕事もらっても満足に果たせないと思うのですが！

…と言いたいと言えない。

いや、だってな、陛下の迫力というか言葉って、否定できない雰囲気満載なんだぞ！

逆らったら殺されそうな雰囲気だ。

素直に陛下に大人しくついていく俺。

一応内容聞いて、無理そうだったら断ればいいわけだしな。

断…れるよな？

選択肢くれるよな？

問答無用ってことないよな？

10 妹姫

陛下に大人しくついていく俺だが、勿論会話なんてない。
気まずい雰囲気が漂うだけだ。

気まずいって思っているのは俺だけかもしれないけどな！

王宮の段々奥の方に行ってる気がする。

王宮がかなりデカイってのは知ってるが、結構歩いているからかなり奥の方にいるんじゃないか？

てか、俺みたいな一般市民がこんな所まで来ていいのか？

ぐるぐると色々考えながらも、陛下に大人しくついていっている俺は、陛下がぴたりと足を止めたのに気づいて、急いで自分も止まる。

ここは奥庭か何だろうか。

整えられた綺麗な庭がそこにある。

流石王宮、職人が定期的に來てるに違いない。

「彩香^{サイカ}」

陛下の口から出た優しげな声に俺は思わずぎよっとする。

どう見ても威圧的で怖い陛下に似合わない声だ。

って、それは流石に失礼か？

「…兄さま？」

ひよっこり庭の木陰から顔を出したのは小さな女の子。

うん？女の子…だよな？

いや、男の子には見えんが、そうじゃなくてなんつか違和感が…。
ぱたぱた小さな足音を立てながら陛下の方に駆け寄ってくるが、俺
の存在に気づいたからなのか、びくっとなって足を止める。

「彩香、^{サイカ}コレは平気だ。お前に危害を加えん」

じいっと探るかのように俺の方を見るその子。

お、俺は何もしないぞ、陛下の言う通り危害を加える気なんてさっ
ぱりないぞ！

「……ほんとう？」

「私がお前に害を与える存在を放置するわけないだろう」

俺を避けるように陛下の方にちよこちよこっと近づいてくる子。

このくらいだと、年齢は5歳くらいか？

着てるもんは結構いいモノっぽいし身分高い子だよな。

あれ？確か陛下を”兄さま”って呼ばなかったか？

「佐久耶、^{サクヤ}この子は私の妹だ。お前にはこの子の遊び相手を頼みた
い」

「遊び相手、ですか？」

警護とかじゃなくて、遊び相手…。

警護とかしろって言われても困るけど、遊び相手って何でだ？
普通そういうのって、同年代の子供とかにならないか？

「何か不満があるか？」

「いえ、ありません！！」

ありませんとも！疑問はあるけどな！
その疑問も怖くて言えないけどなっ！

「彩香^{サイカ}、何か不満があればすぐに言え。気に入らなければすぐに替えるからな」

「…うん」

「仮にもコレは契約者だ。”何かあった時”は壁にでも使え」

「かべ？」

「守ってもらえという事だ」

女の子は、陛下の言葉に対してちよつと考えた後にこくりつと頷く。
にしても俺って壁ですか、陛下。

そりゃ、万が一何かあった時にはこんな小さな女の子放り出して1人で逃げたりなんかはしないが、壁扱いほちよつと凹む。

「佐久耶^{サクヤ}、仕事はあくまで遊び相手だが、万が一何かあった時には…」

「勿論お守り致します！」

「当然だ。彩香^{サイカ}には警護の者をつけてはいるが、万が一の可能性も否定できないからな。何か質問は？」

俺は勢いよく首を横に振る。

質問があるかと言われれば、質問だらけだ。

けど、質問なんて出来ると思うか？！

一般市民の俺が、国の頂点に立つ陛下に気軽に質問なんて出来るわけないっての！

「質問がなければ、これを受け取れ」

陛下から銀色の腕輪を渡される。

鏡のように磨かれた綺麗な銀色の細い腕輪。

商家の手伝いをしているから物の価値ってのがある程度分かるが、これ、結構いい値段するんじゃないか？

「これは彩香^{サイカ}の部屋までの通行許可証と思ってくれていい。明日以降これを身につけ、王宮内に入る時は門番にそれを見せろ」

「はい」

素直に俺はその腕輪を受け取り、右腕にはめる。

うん？これ、精霊の加護があるのか？

どんな加護かは良く分からんが、精霊の気配が残ってるよな。

腕輪は少しゆるいくらいなんだが、俺の腕で固定されているかのようにな動かなくなる。

腕を振ってもすっぱり抜ける事はないだろう。

にしても、精霊の加護があるモノって珍しいよな。

加護の内容ってのは制作者によって変わるんだが、結構色々あるらしい。

精霊の加護があるモノってのは契約者なら作る事はできる。

精度に関しては作成主の器用さがモノを言うだが、勿論俺は器用じゃないもんでその手のものを作るのはかなり苦手だ。

「明日は日が昇る頃にここに来い。今日は以上だ」

陛下が俺の額にとんと指をあてる。

軽く触れただけで、その行動に何の意味があるのかさっぱり分からない俺は、唐突にぐらりと自分の身体が揺れた気がした。

思わず倒れると思った俺は、足に力を入れて踏ん張ろうとする。つと、あ、れ？何だ？

きよとんつとしながら俺は周囲を見回すが、周囲はさっきまでいた王宮の奥ではなく、炎秦区エンシンクの外れだった。

人の姿は殆ど見えないが、ここは確かに城下町で見覚えのある炎秦区エンシンだ。

え？え？え？何だ？！

何が起こったんだ？！

さっきまで王宮にいたのは夢か幻かとも思ったが、腕に光る銀の腕輪がそれを否定する。

ぐらりっと自分の身体が揺れた時に感じたのは、空へと舞いあがる時に感じる時と同じ浮遊感だった。

あ、そう言えば闇って…。

（流石、闇李アンリ。闇の属性をきっちり使いこなしてるね）

（…やっぱり、俺は闇の力で飛ばされたのか）

闇と光の力の特色と言っているのか？

闇と光の属性は空間操作が得意だ。

属性ごとに得意不得意ってのが勿論あるわけで、風は主に補助を得意とする。

勿論風でも空間を飛ぶってことはできなくもない。

何度かやったことあるが、あれは力の消費量と操作の難しさが半端じゃない！

正直、絶体絶命なんかじゃなければ使いたいとは思わないな。

（陛下の機嫌を損ねれば、こうやって勝手に飛ばされるってこともあるわけだな）

（飛ばされるだけならいいよね。渡る空間の間に攻撃仕掛けられて、空間渡った後には肉ミンチとかになることもあるだろうし）

（こ、怖い事をさらっと言うなあああ！！）

（大丈夫だよ、サクなら。なんとかなるなる）

（そういうお気楽思考はどっからでてくるんだ…）

いくら俺でも、そんな事されたら無事じゃ済まないぞ。

その前にそんな事ないように、きっちりがつちりしつかり気をつけるけどな！

（んでも、断らなかったんだね）

（うん？）

（結構素直にあっさり引き受けてたじゃない？サクってこういう身分とか絡むような事って直接的には関わらなかったし）

フィラがそういうのを好まないってのもあるんだが、確かに今まではそうだった。

今までそこそこ身分あるやつと対面した事はあるし、裏から関わった事はある。

直接関われば面倒な事になるだろうと分かっているから、直接手を貸したりはしなかった。

けど、今回は仕方ないと俺は思う。

（あの状況で断れると思うか？）

（断れるんじゃない？）

（できるかああ！！あの迫力の前で断りの返事が出来るヤツがいたらすごいと思うぞ?!）

精霊の力をこっそりでも使った俺も悪かったのかもしれないが、あのこっそりを見破る陛下がすごすぎるんだ！

有無を言わせないかのような迫力。

流石王だと思う。

（どうしても嫌なら、どうにかしようか？）

フィラは基本的に俺が本当に嫌がる事はしないし、俺が嫌だと思う状況になればどうにかしてくれる。

してくれるのはありがたいんだが、俺はそういう時は大抵断る。

何故かと言えば、その手段が大問題だからだ。

（ちなみに、その”どうにか”ってのはどうするつもりなんだ？）

（えーっとね）

ものすごく嫌な予感しかしないんだが：フィラ。

（その1、闇李^{アンリ}と他数名にあの場にサクがいなかったかのよう暗示をかける）

（フィラにしては穏やかな案だな）

（その2、闇李抹殺^{アンリ}）

（まてこらあああ！！！何でいきなり抹殺とか物騒な話になるんだ？！）

（やだなあ、サク、冗談だって）

本当に冗談か？！

その冗談っぽい本気な言葉を何度か聞いた事あるぞ？！

（とにかく、だ！冗談にしても何にしても、フィラの案は却下だ）

（暗示くらいならなんとかなるよ？）

（そこまでして断る酷い仕事でもないだろ？）

（そう？）

何しろ、あの子の遊び相手だ。

何かあれば守るようには言われているが、俺の仕事は遊び相手で警

護専任の人間は他に在るって言ってたしな。

陛下の妹である幼さなら、専任の警護が1人って事もないだろう。

それに、俺みたいな一般市民をひょいっと遊び相手につけるってことは、長期間の仕事ってわけでもないだろうし、大抵身分の高い奴の側に付ける相手ってのは、身元がしっかりしたそこそこの身分のある奴って決まってるしな。

（それに子供の遊び相手なら、森の小精霊達と遊ぶのとあんまり変わらないだろう？）

風のちっこい精霊達とは、森に行くたびに遊ぶ。
というより遊ばされる。

同じように……ってのは無理だろうが似たようなものだと思っていれば、小さい子の遊び相手って仕事はそう難しい事じゃないと思うんだよな。

（サクって……）

（うん？何だ？）

（いや、別に気にしないで。サクはサクのままなら、あの子の遊び相手だろうがなんだろうが大丈夫だろうから）

人間の子供と精霊を一緒に扱ったのがまずかったのか？

いや、フィラならそんな事気にしないと思うんだが……まあ、いいか。

（取りあえず、兄貴達に報告しないとな！）

（明日は朝も早いだろうしね）

（そう言えば、日が昇る頃に来てって言ってたよな）

（だね）

早朝から家を出るなら、やっぱり一言必要だろう。

なにより、明日から家の手伝いが出来ない事は言わないとマズい。
急だから、親父達には悪いよな。

俺の手伝ってる仕事が大層なモノじゃない事は分かってるが、人が
減るってのは大変だろうし。

「よし！頑張るぞ！」

とにかく急いで店の方に顔出すか。

この時間じゃ、まだ親父達も店にいるだろうし。

ああ、そうだ。

（フィラ、当分はいつもみたいな暇つぶしはなしだぞ）

（ええー！って言いたい所だけど、今回はいいよ）

（な、なんだ？やけに素直だな）

（今回の仕事はサクの家の仕事とは違って簡単に放り投げられない
ってものだからね）

なんか妙に素直なのが気になるが、そうしないうんだから多
分大丈夫だろう。

フィラが何かの情報知ってて、実はあの仕事が危険だったりなんて
事がない事を祈りたい。

遊び相手だ、ただの遊び相手なわけだ。

危険なんてないだろ、うん、ないだろ。

11 闇の精霊

早朝、日が昇る前に俺は王宮へと向かった。

日が昇る頃にあの子の部屋に行かなければならないって事は、勿論俺は日が昇る前に家を出なければならぬ。

というより、日が昇る頃って普通まだ寝てるんじゃないか。

そんな時間に行ってもいいんだろうか。

そう思いもしたが、陛下が指定したんだからその時間までに行くしかないだろ。

俺は、陛下に逆らえない小市民さ！

王宮の門番に腕輪を見せれば、驚くほどすんなりと通してくれた。

おお、腕輪効果すごいぞ。

で、王宮の中に入ったのはいいが……。

ど、どこにいけないんだああ！！

昨日は陛下についていただけだから、こんなバカ広い王宮のどこに連れてかれたかなんて覚えちゃいないぞ。

一度通った道は忘れない……なんて特技があるわけもなく、俺は門をくぐってすぐに途方にくれる。

（サク、とりあえず右）

（フィラ）

（右奥の方から入っていけば近いから）

（分かるのか？）

（王宮には何度か忍び込んだ事あるって言った事あるじゃない？ 王宮内はほぼ把握してるよ）

ほぼ把握するほど忍び込んだのか？
そーいや、陛下に見つかった事あるとかって言ってたよな。

（細かい事は気にしないで、レッツゴー！）

（れっつご？）

（とにかく行こう、サク）

（ああ、そうだよな）

フィラに言われた通り右側へと進む。

間に合わないとか怖い事になりそうだから、少し速足で。

にしても、王宮ってのは豪華だよな。

広いし、飾りというか彫刻というか、所々細かい装飾がすごいしな。

（そーいやさ、フィラ）

（何？）

（俺は今回の仕事を引き受けた事は後悔しないけど、フィラはいいのか？）

昨日聞くべきだった事なんだが、親父達の説明とかなんとかで色々バタバタしてフィラに聞けなかった。

俺が知る限りフィラは身分が絡むような事に関わるのは嫌いで、俺もそういうのは好きじゃないわけで、今まで表立ってその手の事に首を突っ込む事はなかった。

だから、俺が一般市民でいられたわけで、家の手伝いなんて事もできていたわけだ。

（何で？）

（今回のってどっちかって言えば、権力が絡むような事だろ？）

（サクが納得して決めた事だから別にいいよ）

随分とあっさりと、気にしていないかのようなフィラの声。
え、いいのか？

（私が今まで権力関係に首突っ込むのが嫌だって言ってたのは、サクの意思を捻じ曲げられて拘束されるような事態になるかもしれないからだよ）

（へ？）

（サクが納得してるなら、私は全然構わないよ。大体契約している精霊って契約相手に無償の好意があるんだよ？逆に言えば、好意がなければ契約なんてしないわけだしね。だから、サクがいいなら私もいいに決まってるでしょ）

（は？何だそれ？）

（あれ、言ってなかったっけ？人間と契約した精霊ってのは、契約相手の人間に対して無条件で好意を抱くんだよ）

（あゝ、：けど、俺とフィラじゃちょっと契約が特殊だろ？）

（特殊でも契約は契約だよ。大体サクの事好きじゃなかったら、無理やりでも契約解除してるから）

：えーっとだな。

あー、その：、なんか本気で照れるぞ。

嫌われてはいないんだろうってのは分かってたが、そうさらつと言われるとかなり照れる。

（この手の好意を逆に利用する人間とかもいるけどね）

（ああ：）

どんな悪い奴であっても、契約している精霊は契約者に従う。

精霊の善悪と人間の善悪ってのは違う。

人間にとって一般的な悪い行為であっても、契約者が命じれば精霊はそれを行う。

フィラ程の精霊になると、フィラ自身で考えて俺に意見言ってきたりするけどな。

それはそれで俺は助かる。

俺だって間違う事があるわけだから、素直に従ってもらっても困る。

って、うん？

何か足の方をすらっと通り抜ける物体が…。

あれは小精霊か何か？

ふよふよしている若干黒い物体。

じっとそれを見続ければ、くるりっと振り返るそれ。

「……闇の精霊か？」

風の小精霊に良く似ているその姿、黒い髪に黒い眼の1枚だけ布をまとったようなちまい精霊。

― だれ？

「俺は佐久^{サクヤ}耶」

― しゃくにゃ？

「…どーして、精霊ってのは俺の名前呼べないんだ？」

正直頭を抱えなくなる気分だ。

風の小精霊もそうなんだが、どうも俺の名前が呼びにくいのか分からないが、皆が皆”サク”と呼ぶ。

フィラもそう呼ぶからってのもあるんだろうが、当のフィラは別に俺の名前を呼べないわけじゃなかったりする。

「サクでいい」

― さく？

「そう、サクだ。ここで何してるんだ？」

― なに? ……さんぽ?

「散歩? 1人でか?」

― ちがう。みんなと

「みんな?」

俺が首を傾げれば、その子の周りにぽんぽんと音を立てて同じ小精霊が現れる。

空間操作が出来る闇なわけだから、突然の出現はおかしくないだろう。

おかしくないんだろうが、この数はなんだ?!

ぽんぽんと音を立てながら現れる小精霊……だああ! 一体何人いるんだ?!

これだけ小精霊がいる場所って言ったら、精霊の生まれる場所くらいだと思ってたが違うのか。

闇の精霊が生まれる場所は海の最深部のはずだ。

ここは海でも何でもなければ、オウシン汪秦の王宮内である事は確実な事であって、これだけ闇の小精霊がいる理由がさっぱりわからん。

― だれ?

― しらないひと

― サクだって

― サク?

― アンリがいったヒト?

― わるいヒトじゃないよ

― サクはこわがらない

― こわくないなら

― 姫さまよろこぶ

わらわらと集まっている小精霊達は互いに話をしている。

ふっと前方に気配を感じた気がした。

精霊達を見ていた俺がふっと顔を上げると同時くらいに、目の前の空間がぐにやりっと歪む。

歪んだ空間がぱっくり割れて、ひょこっと小さな女の子が出てくる。って、陛下の妹じゃないか！

― 姫さま

― 姫さま、サクだよ

― アンリが言ってた姫さまのそばびと

「サク？」

その子は精霊が言う俺の名前に首を傾げながら、ゆっくりと俺の方に視線を向ける。

俺の姿を目にとめると、目がこぼれるんじゃないかってくらい大きく目を開いて驚く。

「えーっと、はじめまして…でいいのか？ 今日から俺が君の遊び相手って事になる佐久^{サクヤ}耶だ。呼びにくければ精霊達と同じようにサクで構わない」

俺はしゃがみこんでその子の視線に合わせるようにゆっくりとそう言う。

見降ろされるってのは、子供であってもあまり気分のいいもんじゃないだろ。

仲良くなる為には、相手の目線に合わせるってのは大切な事だ。

「こわく…ないの？」

「うん？」

「闇の精霊がたくさんいるの、こわくないの？」

「何で怖くなるんだ？」

その子の問いに俺の方が首を傾げる。

数の多さにはちょっと驚いたし、ここに何でこんなにたくさんさんの闇の精霊がいるのかも疑問に思う所だが、ただそれだけだ。

「精霊が怖いって発想が俺には良く分からん。こういう小精霊ってのは可愛いって表現が的確だと思うぞ」

「かわいい？」

「可愛いだろ？小さいし、精霊ってのは純粹だし、素直だしな」

まあ、素直すぎて困る事もあるんだけどな。

特に付き合いが長い、森にいる風の小精霊。

年々遠慮ってもんがなくなってくる。

自分の欲望に忠実に素直で遠慮なく飛びかかってくるわけだ。

そんなことより、だ。

遊び相手と対面出来たからと言って、ここでずっと話しているわけにもいかない。

陛下に言われた場所には行かないとまずいだろ。

「ほら」

俺はその子に右手を差し出す。

差し出された手に、その子はこくりつと首を傾げる。

「昨日の場所に行かないとまずいだろ。歩いて行くと時間がかかるだろうから一緒に行こう」

手を差し伸べたのは、俺が抱えて向かった方が早いからだ。

小さい子供の歩幅ってのはかなり小さいもんだ。

ちょこちょこ歩いていたら時間がかかっちゃうだろうしな。

「空間ぬければすぐだよ？」

「それは俺がちょっと苦手だから勘弁してくれ」

「だめ？」

「諦めてくれると嬉しいと俺は思う」

「…わかった」

しょぼんつとするのを見ると、こっちが悪い事をした気分になってくる。

あゝ、だー、子供は笑ってるのが一番だ。

うん！

俺はひょいっと問答無用でその子の身体を抱き上げる。

びくりっと肩を震わせたが、俺に敵意や害意がないのがわかったのか大人しく抱きかかえられる。

（フィラ、道案内頼む）

（任せて！ふふ）

（…なんだよ）

（よ・う・じょ・しゅ・み、なんだね！）

（違うわああああ！！）

風の力を使ってふわりっと身体を浮き上がらせる。

室内で飛ぶってのはちょっと危険だけど、この方が移動時間が短くて済むだろ。

俺が風の力を使った事に、腕の中の子は再度驚いていた。

契約者って事は昨日陛下から聞いてたから、別に驚くような事でもないんだけどな。

「一気に行くぞ」

「あ…うん」

周囲の闇の精霊達を見回して、ゆっくりと俺は飛ぶ。

ゆっくりと言っても歩くより早く、全速力より遅くくらいだ。

ぽんぽんっと消えたり現れたりする闇の精霊達。

あー、そっか、空間移動できるわけだから、もうちょつと速くしても平気か。

「あ、あの！」

「うん？」

「わたし、サイカ彩香！」

「サイカ彩香？」

「うん！！」

嬉しそうに俺の腕の中で頷く子…サイカ彩香。

あ、そーいや、初めて笑ったよな、今。

やっぱり、子供は笑顔が一番だ。

よし、せっかく遊び相手になったわけだから、サイカ彩香が喜ぶような事たくさんするか！

12 初仕事

昨日の場所へと着いてみれば、庭には人の気配はないがちょこちょこと闇の小精霊を見かけた。

昨日はいなかったはず인데どこから湧いて出てきたんだ？俺は、庭を見渡せる通路へとすとんと足を降ろす。

「佐久^{サク}様でございますね」

「うどおああ？！」

背後からの突然の声に、彩香^{サイカ}を抱き上げたまま俺は飛び上がって驚く。

だ、誰だ？！

ゆっくりと振り返ってみれば、そこには侍女風の女の人が1人。

「私は彩香様の侍女をしております^{アヤメ}絢芽と申します」

「あ、どうも。俺は、本日より彩香^{サク}様の遊び相手として、こちらに参りました佐久^{サク}耶と言います」

思わず普通に挨拶返したが、言葉遣いってこれでいいもんか？相手が気にしてないみたいだから、別にいいんだろうな。てか、俺の叫び声にはツツコミなし？

「これから佐久^{サク}様の仕事内容を説明させていただきます。彩香様、よろしいでしょうか？」

「うん」

こくりっと頷く彩香。

どうぞと、庭の方へと促される。

彩香を抱き上げたまま庭へと足を入れれば、さくりっと草を踏みしめる音がする。

少し歩けば、庭の木陰に石でできた机と椅子があった。

本物の机や椅子のような石の彫刻ってわけじゃないんだが、人が座れる高さの石と表面が平べったい事、その石に座って机として丁度いい高さの結構大きめの表面が同じく平べったい石があれば机と椅子だと思うだろ。

「こちらにおかけ下さい。すぐに、お茶を持って参ります」

「ありがとうございます」

俺は抱き上げていた彩香をゆっくり降ろしながら、周囲を見回す。にしても広い庭だな。

……まあ、でも、こんだけ闇の精霊がいれば、このくらい広い方がいいんだろうけどな。

ひょこひょこ顔を出してくる多くの闇の小精霊達。

本当に、なんでこんなにたくさんいるんだ？

「めずらしい？」

「ん？」

「闇の精霊はめずらしい？」

俺が闇の小精霊達を見ているのが分かったのか、彩香が聞いてくる。そんなあからさまに見てたか？

いや、見てたかもな。

「闇の精霊自体は見た事はあるんだけどな、これだけいるのは見た

事ないからな」

「たくさんいるから、めずらしい？」

「そうだな、これだけ多くの精霊が集まっているを見る事ってあんまりないからな」

実際俺が多くの精霊が集まっているのを見た事があるのは、西の森くらいだ。

西の森みたいな特殊な場所以外じゃ、集まっても2〜3人ってところだろう。

―姫さまがいるから、ここにいるの

―そうなの

―姫さまだいじなの

「うん？姫さまってのは彩香の事か？」

―そうなの

―姫さまなの

―もらないとだめなの

―姫さまはたいせつだから

「あ、あの！あのね！サクの精霊は？」

精霊達との会話を遮るように彩香が質問してくる。

困ってるっばいって事は、”姫さま” ってのは聞かれたくない事なのか。

突っ込むのも悪いから、気にしてない事しておくか。

俺が突っ込んでいい事情かどうかとも分からないしな。

「俺と契約してる精霊ってことか？」

「う、うん。いるってかんじるけど、みえないよ」

不思議そうな彩香。

すぐそばにフィラがちゃんといるのは俺も分かる。

けれど、フィラは今姿を見せる気は全くないようだ。

意外とよくある事なんだが、俺が契約者だって知ってるヤツの前でもフィラは姿を見せなかったりする。

フィラなりの理由ってのがあらしいが、フィラが嫌なら別に構わないと俺は思ってる。

「サクの精霊は風？」

「ああ、風だな」

「そらをとべる？」

「飛べるぞ。なんなら、今度一緒に空の散歩でもするか？」

その言葉にぱあっと顔を輝かせる彩香。

おお！分かりやすいな。

「闇だとね、そらたかくとぶのって、むずかしいの」

「その属性ごとの得意分野ってあるからな」

精霊がふよふよ浮いていたりするのを見ると、契約者も問答無用で空飛べたりするように思われる事もあるようだが、基本空をあっさり飛べるのは風属性だけだ。

風以外でも、極めていけば他の属性と似たような事もできるらしいから、風以外でも飛べるには飛べるらしい。

精霊は空を飛んだり、地面を抜けたりとかは属性関係なくできるが、契約者は人間だからそのあたりは制限がある。

それが精霊と人間である契約者の違いみたいなものかもしれないな。

「お待たせしました、彩香様、佐久耶様」

どうわっ?!

け、気配がまったくなかったぞ、この人…!

いつの間にかすぐそばに、お茶を2人分用意して立っている絢芽さんがいた。

俺は一応ある程度気配探れるんだが、この人の気配はさっぱりだ。

少々顔を引きつらせている俺の事なんか気にせずに、絢芽さんはテキパキとお茶の支度をする。

おお、流石だ、手早い。

「それでは、説明させていただきます」

絢芽さんは立ったまま、俺をまっすぐに見る。

なんか、睨まれているような気がするんだが、気のせいかな?

「佐久耶様のお仕事は彩香様の遊び相手をしていただく事です。しばらくは1日置きに王宮に来ていただき、彩香様のお相手をしていただきます」

しばらくはってことは、日数が増えたり減ったりする事もあるわけだな。

「場所は基本この中庭内で、外出する場合は私に必ず許可をとって下さい。私は彩香様の側に常に控えています」

外出しても構わないって事か。

んじゃ、空飛んだりってのもできるよな。

「そと、出てもいいの?」

「勿論ですよ」

「みんなと一緒にでもいいの？」

ぴくりっと反応したのは、周囲にいる闇の小精霊達だ。

―お空のさんぽ？

―姫さまもいっしょ？

―いっしょにおでかけ？

―姫さまといっしょにそと？

―そとであそべる？

―お空で？

みんなって、この大人数と一緒にか？

俺は思わず精霊達を見回す。

……多い、多すぎるぞ。

「サク、だめ？」

「駄目っつか、2〜3人くらいは一緒に構わないんだろうが、全員となると周囲への影響がどうなるか分からないからやめた方がいいと思うぞ」

―サクのいじわる！

―いっしょがいい！

―みんな姫さまといっしょがいい！

―いっしょがいいの！

―姫さまと！

いや、そう言われても：特殊な場所以外に精霊が多く存在しないのは、多くの精霊が集まる場合は周囲に何かしらの影響を与える可能性があるからなんだよな。

ここにこれだけの闇の小精霊がいて、ここが普通の王宮と変わらない状態であるのが不思議なくらいだ。多分、ここには何か精霊の加護みたいなのがあるとは思うんだが、ぱっと見では殆ど分からない。

「佐久耶様は精霊が見えるのですか？」

静かな絢芽さんの声に、ぞわりっとなる。
ひっ…！

あ、あの、背筋が凍りつくかと思ったのですが…絢芽サン。

「み、見えますよ」

「そう…ですか」

すうっと絢芽さんの目が細まる。

先ほど感じた殺気が強くなる。

ご丁寧に俺にだけはっきり向けてくる。

何で俺にだけ殺気向けてくるんだ？！

「サクはけいやく者だよ」

「はい、存じておりますよ、彩香様」

「だから、見えるの」

「はい」

だから、何で俺に殺気向けてくるんだ？！

何で俺？！

俺なんかしたか？！

契約者だから警戒してるってことはないだろうし、何でだ？！

—アヤメは姫さまがだいじ

―アヤメは姫さまがだいすき
―アヤメは姫さまがたいせつ
―アヤメは姫さまのためにここにいるの

「私は精霊を見る事ができません、佐久耶様」

「は、はあ…」

「彩香様がおっしゃる、この場にいらっしゃるだろう闇の精霊達の姿も見え
ません」

―けど、アヤメはいい人

―見えなくても、こわがったりしない

―ひていをしない

―そんざいをみとめてくれてる

「ですから、佐久耶様が、彩香様をここにいて闇の精霊ごと受け入
れてくださることを願っています」

祈るような言葉と懇願するかのような殺気も混じった眼。

ああ、そういう事なのか。

俺はなんとなく絢芽さんが俺に殺気に向けた理由が分かった。

絢芽さんは彩香が大切。

けれど、彩香が大切になっている精霊達の事が何も分からない。

理解しようとするけど、見えないからなかなか難しい。

でも、俺は契約者ってだけでそれができる。

この闇の小精霊達の事を、彩香と同じように理解する事が出来るか
どうかは分からないけどな。

彩香の存在ってのは、十中八九表沙汰に出来ない事何だと思う。
俺から見て契約者には見えない彩香。

けど、闇の精霊が見え、闇の力が使える。

かなりの面倒事で厄介事なんだろうな、という事はこの時分かって
いた。

けど、ぱっと見せた彩香の笑顔。

それをどうしても見捨てる事が俺には出来ないと思った。

決して、フィラが言うような幼女趣味ってわけじゃないからな！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4508m/>

風鈴の契約者

2011年5月14日05時04分発行